とある二人の無能力者（レベル０）

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある二人の無能力者（レベル０）

【Ｎコード】
Ｎ８２０９Ｉ

【作者名】
キラ

【あらすじ】
受験勉強のため、２０１２年３月まで更新停止中です。学園都市に住む無能力者、上条当麻と佐天涙子。二人が出会うとき、物語が始まる！（注：おそらく原作のタイムスケジュールと合わないところがあると思いますが、どうか多めに見てください。）
第二部開始。どんどんドタバタコメディーに近くなってきてる…ｏｒｚ
最初はひどい文章ですが、ちょっとずつ良くなってきてると思います（多分

0．二人の日常（前書き）

初投稿ですので、いろいろ見るに耐えない部分があると思いますが、よろしくお願いします。

0．二人の日常

9月に入っても、学園都市はうだるような熱気に包まれていた。時刻は6時を回っていたが、それでも気温は30度を超えている。
そんな学園都市の中の、とある学生寮の一室で、銀髪シスター・インデックスがうなり声をあげていた。
「う～～、暑いんだよとうま」
それに答えるのは黒髪ツンツン頭の少年・上条当麻である。
「ああ、暑いな」
「わたしの考えでは、えあこんをつければいいとおもうんだよ」
「だから、そのエアコンが壊れちまってるんだろうが」
「いつ直るの？」
「3日後」
そう上条が答えると、インデックスが床をごろごろしながら騒ぎ立てる。
「いやだいやだ～えあこんがないといやなんだよ！」
「そんな駄々っ子みたいにやっても、エアコンは直らないぞ」
とまあ、上条家はこのような事態に陥っており、インデックスの機嫌は非常に悪かった。
「…不幸だ」

その1時間ほど前。佐天涙子はよく来る喫茶店の中にいた。
「う～ん、冷房が効いてて涼しいわね～」
そう言ったのは常盤台中学のエース・御坂美琴だ。
「そうですわね」
「まだまだ外は暑いですね」
続いて風紀委員の白井黒子、同じく風紀委員で同じクラスの初春飾利が言葉を発する。

「本当、早く涼しくならないかなあ～」
そして、佐天涙子は無能力者だった。幻想挙手事件のとき、初春にレベルなんて関係ないと言われて、それはとても嬉しかったけど、
（やっぱり、気にしちゃうな…）

店員への注文を終え、おしゃべりの時間に入る。しばらくとりとめのない話をした後、ふと佐天が思いついたように話を切り出した。
「今の時期に彼氏って、いたほうがいいんですかね」
「いきなりどうしたんですの」
白井が唐突な話題に疑問を覚える。
「いや、友達が今日、彼氏ができたって言ってたんですよね。だから、ああ～もうそんな時なのかなあ　って。皆さんどう思いますか？」
三人が少し考え、やがて初春が答える。
「ひとそれぞれだと思いますけど…私は、まだ早いんじゃないかと思います」
「私もそう思いますわ。この時期に男にうつつを抜かすなどもっての他」
「そっか、やっぱりそうですかね」
彼氏をつくるなんて全く考えていなかった佐天は、二人の意見を聞いて少し安堵する。と、そこでなにやらうんうん悩んでいる御坂に気づいた。
「御坂さんはどうですか？」
「ふぇ？そ、そうね、やっぱりまだ早いんじゃない？」
「お姉さま。どうしてそんなに動揺していらっしゃいますの？…まさか」
「な…べ、別にあの馬鹿のことを考えてたわけじゃないんだから！」
「やっぱりですのおおお！！あの類人猿がああああ！！！」
「だから！違うって言ってんでしょうが！」

ぎゃーぎゃー騒ぎ始める二人。傍から見ている佐天と初春にはなぜこうなっているのかよくわからなったが、佐天には一つだけわかったことがあった。

「つまり御坂さんには気になっている人がいるというわけだね」

「へ？そうなんですか？」

「当たり前でしょう初春。話の流れ的に考えて」

「そうなんですか～御坂さん、好きな人がいるんですね」

「違うって！！」

いつに間にか御坂が二人の話を聞いていて、白井は雑巾のように床に突っ伏していた。

「お待たせしました」

店員が飲み物を運んできたので、この話題は終わりとなった。（というより、御坂が強引に話を逸らした。）

その日の夜。ベッドに転がった佐天は、御坂の様子を思い出していた。

「ま、彼氏とかいっても、まず好きな人がいないし、考えてもしょうがないよね」

そう結論づけ、目を閉じる。明日も休みだが、ゆっくりするか、出かけるか、どうしようなどと考えているうちに、佐天は眠りに落ちていった。最後に思っていたことは、

（あの御坂さんが気になる人って、いったいどんな人なんだろう？）

0．二人の日常（後書き）

読んでいただいてありがとうございました。
時系列的には、6～8巻のどこかに入ればいいな～と思っているんですが、おそらく上条の入院のことなどもあって、おかしくなるんじゃないかと思います。喫茶店で黒子を出しておきたかったので、こうなってしまいましたが、これからも続けようと思うので、良かったらご覧になってください。

1．二人の邂逅

次の日、日曜日。
上条は、特にどうするということもなく、ごろごろしていた。インデックスはというと、カナミンの再放送を見ていたのだが、それが終わったとたん急に上条にかみついてきた。（まだ弱め）
「いたたたた！な、なんだ、なんでいきなりかみついてくるんだ？さすがに会話もなしに突然されるの　初めてなんだけど！」
「とうまがどこにもつれていってくれないからだよ！！えあこんがないんだったら外にいたって暑さは　変わらないんだよ！」
暑くて暑くて仕方がないので、インデックスの行動は過激になっているのだ。
「今週はいろいろ不幸で疲れたから、ゆっくりしてたいの！」
「不幸なんていつものことだから変わらないでしょ！」
「うわっ今さりげにめちゃくちゃひどいこと言いましたよこのシスター！そんなんで良く修道女とか言　ってられるね。とにかく、今日はだるいからどこにも…」
ガブリ（↑さらに強くかみつく音）
「連れてけ～～」
「んぎゃあああ！！やめてやめて、やめてくださいインデックスさん！そうだ、なんかうまいもん買っ　てきてやるから、それで許して、な？」
そう上条が言うと、インデックスは少し考えた後、
「じゃあ、チョコレートと、クッキーと、ドーナツと…」
そうして十品ほど言った後、
「あと、○○印のバニラアイスを買ってきてくれたら、許してあげてもいいかも」
なんだか結構痛い出費になりそうだな、と思いながら、上条は疑問に思ったことを口にする。

「なんでアイスだけ商品名まで指定するんだ？」
「あれはものすご～くおいしいからだよ。ぜっったいにそれじゃないと嫌だからね」
「はいはい」
こうして上条は、自らの頭部を守るため、スーパーに出かけたのだった。

「…なにもない」
結局、今日は家でだらだらしていようと決めた佐天であったが、昼食を作ろうと思って冷蔵庫をのぞいたところ、ほとんど空っぽだということに気づいたのだった。
「インスタントもないし…おっかしいなあ。昨日ちゃんと見てなかったのかな」
我ながら不覚、と思いながら、なにも食べないわけにもいかないので、仕方なく最寄りのスーパーに出かけるのだった。

スーパーに入った上条は、シスターへの献上品をしたためたメモを片手に次々とお菓子を手に入れていく。
「ドーナツは…これでいいな、安いし。エアコンの修理代も払わなきゃいけないから、なるべく節約す　るべし」
もともと無能力者なせいで入ってくる金が少なかった上に、暴飲暴食シスターを居候させ、自分は入院しまくるという状況のせいで、上条家の家計は火の車なのだが、かみつかれて命を失うよりはましだ、と考える上条。なぜか居候との立場が逆転してしまっているのだが、本人は気づいていない。
「後は、アイスクリームだけだな」
よーしあと一つだ、などと意気込んでいくが、上条当麻ともあろう人間が、そんなにうまく事を運べるはずがない。

「まあ、こんなもんでいいかな」

一方その頃、佐天もほぼ買い物を終えていた。こちらも無能力者なので、慎重に品定めをしている。
上条と違うのは、まだ服などを買う金が残るということか。
「せっかくだし、あのアイスクリームも買っとこうかな」
だから、暑い中わざわざ出てきた自分へのご褒美として、アイスの一つくらい買いたくもなる。カートを進め、アイスクリーム売り場に到着。お目当ての品を探すと、
「おお、あと一個！ラッキー」
と、アイスに向かって手を伸ばすと、
「へ？…うわっ！」
全く同じタイミングで手を出した人と、手が重なり合った。
「うわ！す、すみません！」
手を出した人—妙に特徴のあるツンツン頭の高校生（？）が謝ってくる。
「これ、どうぞ」
さらに、〇〇印のアイスを佐天に差し出してくる。
「いえ、そちらがどうぞ」
「いや、俺は他のでいいから。こういうときは男が引き下がるもんだ」
いつそういうもんになったのかわからないが、大好物で、内心とても欲しいので、
「じゃあ、もらっておきます。どうもありがとうございました」
ぺこっと一礼をすると、佐天はレジへ向かった。

帰り道。
「しかし、な～んか印象に残る人だったなあ」
やはりあのツンツン頭のせいだろうか、と佐天は先ほどの少年について考えていた。
「また会ったりなんて…しないか」

上条は、自分の学生寮の部屋の前で立ち尽くしていた。そして、意を決したようにドアを開く。
「た、ただいま～」
「遅いよとうま！」
奥からインデックスが出てくる。
「ほら、買ってきたぜ」
買い物袋をインデックスに渡す。
「わーい！……あれ？とうま、○○印のアイスは？」
「いや…その…いろいろ回ったんだけどさ、無かったんだ、すまん！」
そう言って覚悟する上条だが、かみつきが来ない。まさか許してもらえたのか！と希望をもって顔を上げると、
「人をさんざん待たせておいて……なかった？」
単に怒りのパワーを充電しているだけだった。
「いやいやちょっと待って！暑くてイラついてんのはわかるけど、おちつぎゃあああああ！！！！」
上条の断末魔は、一階にまで響いたという…

1．二人の邂逅（後書き）

あとで読み返してみると、やっぱり読みにくいですね…。読んでくださった皆さん、どうもありがとうございます。よかったら次も読んでください。

ちなみに作者の好きな女性キャラは
美琴＞＞佐天＞姫神＝オルソラ＞五和＞吹寄＞その他です。

行間？（前書き）

今回はオリキャラが出ます。

行間？

上条と佐天が出会う前日。一人の少年が裏路地を歩いていた。しかし、人目につかない場所は、不良たちの格好の溜まり場なのである。そこまで体が大きくなかった少年は、気が付くと柄の悪そうな男たちに囲まれていた。

「おうおう、俺たちの縄張りに勝手に入ってくるとはいい度胸だな。通行料をもらおうか」

リーダーらしき男がニヤニヤしながら言う。少年は、下を向いて黙ったままだ。

「顔上げろよ、コラァ！」

不良の一人がそう言って少年の胸倉をつかもうとした。しかし、

次の瞬間、男は数メートル吹き飛ばされていた。

「うるさいな」

少年が顔を上げると、そこには凍てつくような鋭い眼光があった。まるでこの世に楽しいことなんて一つもないというような、絶望した雰囲気を出している。

「な……高位能力者…？」

男たちが恐怖の表情を浮かべる。逃げようとするが、少年のだす気配に気圧されてうまく体が動かない。

「覚悟しろよ、お前ら……」

少年が手をあげる。そこに、膨大なエネルギーの塊ができあがる。

「大能力者の力、思う存分味わえ」

不良たちの悲鳴は、夜の雑踏にかき消され、表通りの人の耳には届かなかった。

「……つまんねえ奴等」

そうつぶやいた少年の表情は、どこか悲しげなものだった。

行間？（後書き）

あまり上手なキャラは作れませんでしたが、がんばってとりあえず完結させようと思います。

2．二人の再会（前書き）

みんな、オラに文才をわけてくれ～～（泣）

2．二人の再会

「あれ…ここは？」
気がつくと上条は、今まで見たこともない場所に突っ立っていた。
あたりは真っ暗で、目の前に十メートルはあろうかという大きな扉があるだけだ。
「……どういうことだ。まさかいつの間にか真理の扉を出現させてしまったのか？」
とっさにこんなことを思いつくとは、漫画の読みすぎではないだろうか。とその時、扉が少しずつ開いていく。向こう側にいたのは……
「あれ？インデックス？」
「とうま、おめでとう。なんとか天国にくることができたんだね」
「へ？おい、なんのこと…」
「女癖が悪いから。心配していた」
「姫神！お前もなんでここに…」
「あんたがいなくなると、電撃をぶっ放す相手がいなくなって寂しいわ」
「御坂も！なにがどうなってるんだよ！しかも今かなり嫌なこと言われたし！」
「だから、君、死んじゃったんだよ？」
「へ？カエルの先生？それってどういう…」
「手遅れだった。じゃ、天国で楽しくね？」
「いやいやぜんぜん納得できないって！ちょっと待っ…うわ！天使に腕をつかまれた！わ、わ、ひ、引　っ張るなーー！！」

「……という夢をみたのさ！」
「変な夢。どうしてそんな夢を見たの？」
というような会話を交わしながら朝食を食べる上条とインデックス。
上条は、おそらく悪夢の原因は昨日死にかけるまでかみつかれ、最後の力を振り絞ってインデックスのために食事をつくった直後、ベッドに倒れこんだことだと確信しているのだが、言わないのが賢い選択だ。
「ところで、今日はいつごろ帰ってくるの？」
「授業自体は学校側の予定で早く終わるんだけど、子萌先生の特別補習を受けるから、いつもと同じく　らいかな」

「初春」
「わっ！…佐天さん、授業中ですよ」
その日の2時間目のこと。いつものように、佐天は初春の後ろの席なのをいいことにペンで初春の背中を突っついた。
「いいからいいから。それより今日、授業早く終わるし買い物にでも行かない？ちょっと買いたい服があるんだよね」
「いいですけど…それ、休み時間に言えばいいんじゃないですか」
「だって、退屈だったし」
「…はあ」
相変わらずだな、と初春は感じた。まあ、そこが佐天涙子のいいところでもあるのだが。

「それじゃあカミやん、補習がんばって～な～」
放課後、一人補習の準備を始める上条に、青髪ピアスが声をかける。

「ったく、ひやかすんならとっとと帰れ青髪」
「いやいや。子萌センセーと二人きりで補習なんて、僕はうらやましんよ？」
かなり変態チックな表情をする青髪。
「残念ながら俺はまったくうれしくない」
「せやけどカミやんのことや、これが原因で新たなフラグが立つかもしれんで？」
「んなわけあるか」
どうして俺はそんなキャラにされてるんだ、と感じながら上条は呆れながら言う。
「はは、まあこれ以上立てたら殺すつもりやけどな。じゃ」
教室を出て行く青髪。上条は、最後のセリフを言った時の青髪のものすごい表情に恐れおののいていた。

「いやー大漁大漁。いっぱい買っちゃったねー」
「そうですね、私もちょっと調子に乗りすぎたかもしれません」
買い物を終え、帰り道を歩く佐天と初春。二人とも荷物はいっぱいだ。
「あ、電話」
その時、初春の携帯が鳴った。しばらく会話した後、携帯を切る。
「急な仕事ができちゃいました。すぐに行かないといけません」
そう言って、初春は走り出そうとする。それを慌てて佐天が止める。
「ちょっと待った！その荷物、どうするの？」
「量が多すぎるので、いったん家に置いてから…」
「なら、私が持っていくよ」
「え？悪いですよ、佐天さんだって荷物いっぱいなのに…」
「だーいじょうぶ。このくらい平気よ。急いでるんでしょ？」
「じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言うと、佐天に荷物を預け、初春は風紀委員の仕事場へ駆け出した。

「…とはいったものの、重いなあ…」

少し歩いただけで、結構疲れる。おまけに、荷物を両手と胸で支えているような感じなので、前がよく見えない。がんばれ私、友達のためだ、と自分で自分を励ましていると、上の荷物のバランスが崩れた。何とかしようと右に左に体を傾けるが、うまくいかない。終いには、

「う、うわーー！！」

何かにつまずき体のバランスを崩して、右斜め前に倒れてしまった。

「あっちゃ～。でも、あんまり痛くなくてよかっ……」

アスファルトに転んだほどの衝撃を受けなかったのは、巻きこまれて倒れた少年を下敷きにしたかららしい。

「わっ！す、すみませんごめんなさい申し訳ありません！」

少年の体から飛びのいて謝罪の言葉を連ねる佐天。下敷きになった少年も上半身を起こす。

「いえ、こっちこそボーっとしてたから……あれ？確か…」

「あー！昨日の人！」

「不幸にも」下敷きになったのは、あのツンツン頭の少年だった。

2．二人の再会（後書き）

なんか中途半端なところで切っちゃってすみません。これから更新が少し遅くりますが、温かい目でご覧になってください。

来年こそ、「このラノ」男性キャラ第一位は上条さんだ！

行間？

大神祐樹がとある少女に出会ったのは、小学三年生の時であった。
身体検査の結果、見事無能力者から低能力者にレベルアップし、スキップしながらの帰り道。
ひとりの少女が、困った様子で立ち尽くしていた。
「どうしたの？」
気分もよかったので、困ってるなら手伝ってやるか、というような気持ちで、大神はおそらく年下であろう少女に声をかけた。
「…わたしのハンカチ……ぐすっ…」
見ると、少女は今にも泣き出しそうな顔だった。事情を聞くと、どうやらお気に入りのハンカチが風に飛ばされ木の上の方にひっかかってしまったらしい。少女が指差すほうに目をやると、なるほど確かにピンクのハンカチが木にひっかかっていた。よっぽど大事にしてるんだな、と思い、助けてあげようと考えた。
「泣かなくても大丈夫、俺が取ってあげるよ」
そう言うと、少女は驚いた表情をしたが、
「…むりだよ。あんな高いところ」
すぐまた暗い顔になった。
「心配すんなって。俺、能力が使えるんだ」
大神が手を木に当てた直後、木に衝撃が走り、揺れたことによってハンカチが落ちてきた。低能力とは言っても、木を揺らすくらいなら可能なのだ。そのハンカチをキャッチし、少女に渡す。
「はい。取れてよかったな」
すると、少女の顔はみるみる生気を取り戻し、
「ありがとう！」
と、輝くような笑顔で言った。今まで見てきた中で、一番いい笑顔だと思った。この少女に、さっきのような暗い表情は似合わない。
そして、もっとこの笑顔が見たい、大神は純粋にそう思った。

「俺、三年生の大神祐樹。君は？」
「わたしは、二年生の朝井美穂っていうの」
それから時々、学校やその道中で二人は出会うようになり、そのたびにいろいろなことを話した。
「わたし、まだ身体検査でなんの能力も出なくて」
「心配すんな。まだ小二なんだし、そのうちきっと能力が使えるようになるよ。なんか困ったことがあ　ったら言ってくれ。手伝うから」
「ありがとう！祐樹くん」
そして、いつしか二人は家でも遊ぶようになり、大神が美穂の兄貴分というようになっていった。それは月日が過ぎても変わらず、中学に入っても、二人は仲がよかった。
（こいつを守るためにも、強くならないと）
大神は、そう思っていた。

三年後。大能力者・大神祐樹は、裏路地で再び不良たちを吹き飛ばしていた。多くの男たちが悲鳴をあげている。
「……くそっ」
やけになったように能力を使う大神の目は、光を失っていた。

行間？（後書き）

大変遅れて申し訳ありません。パワポケ１２にはまってしまって…
これから週一くらいのペースになってしまうと思いますが、読んで
くれるとうれしいです。

3．佐天のなやみ（前書き）

一週間後に更新すると言っておきながら、この体たらく……
本当に申し訳ありませんでした。でかいこと言わずに、これからは
不定期更新ということにさせていただきます。

3．佐天のなやみ

「本当にいいんですか？ぶつかっちゃった上に、荷物まで持ってもらって」
「気にすんなよ、俺もよそ見してたし。それに、その量を一人で持って帰るのはきついだろ？」
「…まあ、そうですけど……」
先程、補習帰りにきれいに人と衝突した上条は、そのぶつかった人とこの前会ったことを思い出した。その後、彼女の持つ荷物のあまりの大きさに見かねて手伝うと言い、なんだかんだで二人は一緒に歩いている。さり気に青髪ピアスの言ったことが当たっているようなと考えた上条は、いやいやこんなのいつもの駄フラグだろうと思い直していた。
「あの」
ふと、隣の少女が声をかける。
「ん、何？」
「名前、まだ言ってなかったですよね。私、佐天涙子っていいます。中一です」
「そっか、そういや自己紹介がまだだったよな。俺は上条当麻。高一だ」
上条が自分の名前を言うと、佐天という少女は急に難しい顔つきになる。
「あ、あれ？俺、なんか変なこと言った？」
「あ、いえ、その名前をどっかで聞いたような気がするんですけど……う～ん」
「き、気のせいじゃないか？俺は別に有名人でも何でもないし」
「…まあ、そうですよね」
佐天が記憶の探索をやめたようなので、上条はほっとする。ひょっとしたら、記憶を失う前の自分と何か関係があるのかもしれないか

らだ。記憶喪失という事実を隠すためにも、ややこしいことになるのは避けたい。……ちなみに、真実は白井黒子が上条を呪う言葉をつぶやいていたのが佐天の耳に残っていただけなのだが。

お互いに自己紹介したことで、その後も二人は自らやその周りのことについて二、三語り合った。
「つーことで、うちの委員長はことあるごとにおでこクラッシュをかましてくるわけですよ」
「はは、個性的なんですね、上条さんのクラスの委員長は」
「ま、うちのクラスは変なやつが多いからな」
「でも変といえば、私の友達も結構なもんですけどね。頭に花のっけてるし」
「…なんか想像できないんだが」
「見たらわかりますよ。…あっ」
佐天が立ち止まる。
「どうした？」
「家までもうすこしかかるんで、そこの公園で休みましょう。ちょうどソフトクリームも売ってるん　で、荷物のお礼におごります」
「えっ？別にお礼なんて…」
「遠慮しないで下さい。この前アイスを譲ってもらったこともありますし、おごらせて下さい」
そこまで言われて断るのは悪いと思い、上条は、
「わかった」
と答えた。実際、アイスを譲ったせいでひどい目にあったのだから。

「いろいろ種類がありますよ。どれにします？」
「お前は何にするんだ？」

「私はこのバニラとチョコのミックスです」
「じゃあ、俺もそれにするよ」
ソフトクリームの値段は、いい材料を使っているとかで、それなりに高いものだった。注文をして少し待った後、店員から思ったより大きめのソフトクリームを渡してもらう。近くのベンチに移動し、そこに座る。
「それじゃあ、まだこれじゃお返し全部というわけにはいきませんけど、食べちゃってください」
そんなこと気にしなくていいんだけどな、と思いつつ、上条はソフトクリームを口に運んだ。その瞬間、補習で疲れた体に冷たい感触が伝わって行く。
「うわ…これすげぇうまいな。さすが、値段がするだけあるぜ」
「気にいってもらえてよかったです」
嬉しそうにそう言うと、佐天もソフトクリームを食べ始める。
「はぁぁ～、やっぱりおいしいですね～。たまにはこういうのもありかな～」
どうやら彼女もあまり贅沢ができるわけではないようだ。まあ、さすがに一個二千円のホットドッグを買うようなやつは一握りだろうが。
「佐天はレベル、いくつなんだ？」
贅沢うんぬんで気にかかったので、聞いてみる。すると、おいしそうにソフトクリームを舐めていた佐天の表情が、少しだけ曇る。
「…ゼロです。残念ながら」
「何だ、じゃあ俺と同じか」
「え？そうなんですか？」
驚いたように言う佐天。
「そんなおかしいことでもないだろ。そもそも無能力者が六割いるんだから。今日だって、全然能力開　発の分野で結果がでないからって補習食らってたんだぜ」
「そうなんですか……」

そう言った佐天は、少し嬉しそうだった。仲間を見つけた、というような様子だ。
「私も、開発で結果が出ない本物の無能力なんですよ」
「そっかお前もか。コロンブスの卵だのすけすけみるみるだの、やれって言われたってできないよな」
「そうですね。一生懸命やってもできないのに、なんで見える人がいるんだろうって思っちゃいます」
「だよなー」
これって出来の悪いやつらの慰めあいじゃね？と思いつつも、その通りだと同意する上条。佐天の言葉はさらに続く。
「私の知り合いに、高位能力者の人が二人いるんです。一人は風紀委員なんですけど…低能力者の私の　友達が、その人といい感じのコンビなんですよね。そういうの見てると、自分が無能力者なことに劣　等感を感じちゃうんです」
「……それは、必要ないんじゃないのか？」
「え？」
今度は、上条はうなずかなかった。彼女の言葉に、ひっかかりを覚えたからだ。
「能力のレベルで劣等感なんて感じる必要、ないと思うぞ」
「どういうことですか？」
「能力なんて、人間の本当の中身に比べりゃ飾りみたいなもんだろ。能力があったって、それを悪用す　るごろつきとかもいるしな。そういうやつらとお前とじゃ、お前の方が百倍素敵だ」
「……」
佐天は黙って聞いている。ちなみに、上条は今自分が女性に向かって素敵だと結構恥ずかしいセリフを口走っていることには気づいていない。
「それにな、無能力者だろうがなんだろうが、どんな人間にもそいつにならできること、そいつにしか　できないことがあるはずだ。……お前、友達の荷物も運んでたんだよな？」

「あ、はい。急に風紀委員の仕事が入って、急いで行かなきゃいけなかったから」
「そのことだって、お前が荷物を持ってくれたから、その子はすぐ仕事に向かうことができたんだ。確　かに、高位能力者が成し遂げることに比べたら、それは小さいことかもしれない。けどな、それは間　違いなくお前にしかできなかったことだと俺は思う」
とりあえず言いたいことを全部言った上条は、佐天の反応を待つ。
二回会っただけの相手に、ちょっと生意気なことを言い過ぎたかな、しかもアニメのセリフパクッてるしと内心恐々としていると、
「…すごいですね、上条さんは」
「ウェッ！？」
予想外の言葉に戸惑う上条。
「今の言葉、元気が出ました。会って二回の人を、そんな風に励ますことができる上条さんは、すごい　と思います」
「そ、そうか。そりゃよかった」
とりあえず反感は買わなかったみたいだと、ほっとする上条。
「じゃあ、早くソフトクリーム食べちゃいましょう。溶けちゃいますから」
「あ、忘れてた！」

「今日は本当に、ありがとうございました」
「いやいや、どういたしまして」
とりあえず荷物は学生寮の佐天の部屋の玄関まで運びこんだ。公園で休憩したこともあり、時刻は結構遅くなっていた。早く帰って夕食の準備をしないと、あの暴食魔人の機嫌を損ねてしまうと、上条は焦っていた。
「んじゃ、さいならっ！！」

ダッシュでその場を立ち去る上条。
「あ、ちょっとっ…！よかったら携帯の番号、教えてもらおうと思ったのに」

時刻は午後十一時。そろそろ眠くなってきたので、佐天はベッドに転がり込んだ。頭の中は、今日二回目に会った高校生のことだった。彼が自分と同じ無能力者だと知り、ついこの前から気にしていたことまで口にしてしまったが、それでよかったと思う。それに対する答えを、もらうことができたのだから。
「…私にしかできないことか……」
なんだか、少しだけ前に進んだような気がした佐天であった。

3．佐天のなやみ（後書き）

…会話って難しいね。ちなみにアニメのセリフのパロっていうのは、エヴァンゲリオンの初号機暴走の回の、加持さんのあの言葉です。まあ、意味は全然違っていて、言い回しだけをパクったのですが。

4．上条の不幸

「佐天さん、何かいいことでもありましたか？」
翌日。学校の休み時間にそう尋ねてきたのは初春飾利だ。
「うん？なんでそんなこと聞くの？」
「いえ、昨日荷物を取りに行った時もそうでしたけど、なんだかいつもより元気な気がしましたから」
「まあ、ちょっとある人に励まされてね」
「え？佐天さん、悩み事なんてあったんですか」
「そりゃあ、うら若き乙女には悩むことの一つや二つあるでしょう」
「そ、そうでしょうか……」
よくわからないけど、とにかく嬉しいことがあったことは理解した初春は、そんな曖昧な返事をした。

ところ変わってとある普通の高校。上条当麻はぐったりと机に突っ伏していた。昨晩、帰りが遅くなった（夕食が遅くなった）ことで終始ご機嫌斜めのインデックスの相手をしながら、授業が午前までだったことによりいつもより多めに出された宿題をするのに神経をすり減らした結果だった。その上条の机に近づいてくる人影がひとつ。
「ちょっと上条当麻！さっきの授業中といい、いつにも増してだらしないわよ！しゃきっとしなさ　　い！！」
このクラスの委員長、吹寄制理である。彼女はいつもいつも不幸だ不幸だと言ってだらだらしている上条の態度を非常に嫌っているのだ。

「……勘弁してくれ吹寄。今日は特別疲れてんだ。お前の話を聞くだけの体力は無い」
「な、なんですって！！言っとくけど、補習ごときで疲れたとか言うんじゃないわよ」
「わかってるよ。それだけじゃないって」
そう上条が答えたとき、後ろの席でしゃべってたクラスメイトの一人が、こちらを向いて、
「そういえば上条、お前昨日女の子と公園でソフトクリーム食ってたよな」
などとのたまった。
「それ本当か」
「本当だって。かわいい娘だったよ」
「くそ～、また上条かよ～」
男どもは勝手に話を進めているが、それどころではない。上条の耳が正常なら、今隣に立っている少女から『ブチッ』という音が聞こえたからだ。
「あ、あの～、吹寄さん？」
「ほう…女の子と遊んでいたから疲れたと…ほう……」
吹寄の体から、隠しきれない怒りのオーラが！！
「ち、違うんだ、別に遊んでたわけじゃなくてだな……てちょっと！指をコキコキ鳴らすのやめて！上　条さんに弁解の時間を……」
「貴様の根性、たたき直してくれるわぁぁ！！！」
「んぎゃーーーー！！！！！」
日頃の行いが悪いからか、問答無用で制裁を食らう上条だった。

その日の夜の裏路地。
「…くそ、どうすりゃいいんだよ」
途方にくれた顔で、大神祐樹はつぶやいた。周りには、彼に襲い掛かってきた不良たちが倒れている。
「どうすりゃ、この胸糞悪い気分は消えるんだ…」
とにかく、暴れたい。そう彼は思っていた。

4．上条の不幸（後書き）

ふぅ……

全然関係ないですが、最近『仮面ライダー剣』に再びはまっています。オンドゥルネタもおもしろいですが、やはりあの作品の一番の魅力はストーリーの完成度の高さでしょう。個人的には、平成ライダーの中ではクウガの次によく出来た展開だと思います。

5．大神祐樹の暴走

数日後の土曜日、時刻は午後二時。なぜか数学の宿題の量が半端じゃないので、今日は勉強をがんばろうと決心し、佐天は朝から机に向かっていた。

「まったく、何でいつもは出さないのにこうまとめてドンと出しちゃうのかな～」

ちびちび毎回出してくれたらちゃんとする……かもしれないのに、とぐちる佐天だったが、ふとテレビの脇に置かれているものに気づいた。

「あっちゃ～。今日返却日だ～」

それはレンタルしたＤＶＤであった。一日でも遅れれば高い延滞料金を取られてしまうところだった。

「危なかった…面倒だけど、休憩がてら返しに行こう」

正直集中力が切れかけていたので、そう迷わずすぐにレンタルビデオ店へ向かう佐天だった。

レンタルビデオ店まではそう遠くなく、歩いて行ける距離だ。

（そういえば、あれからあの人見かけないなぁ）

出会った日から、それとなく周囲に気を配って歩いたりしているのだが、あの少年は見つからない。あんなツンツン頭はなかなかいないので、近くを歩けば気づくはずなのだが。

そんなことを考えていてふと前を見ると、小さな女の子がいた。道に並んでいる木を見上げており、何やら困っているようだ。とそこで、その木に風船が引っかかっているのが見えた。どうやらあの女

の子のものらしい。
「あの風船、取りたいの？」
そう声をかけると、女の子はこくりとうなずく。それを見た佐天はうなずき返すと、ジャンプして風船の糸をつかもうとする。微妙な位置にあったが、十度くらい飛んで、ようやく取ることができた。
「はい、どうぞ」
そう言って風船を渡すと、女の子は
「ありがとう、お姉ちゃん！」
とにこりと笑って走っていった。
（元気だなぁ、いいなあ若いって……ていかんいかん、私だってまだ中一でしょ）
宿題に追われる週末を過ごす佐天に、その小さな女の子はとても幸せそうに見えたようだ。
自分はまだ若い、と頭に叩き込んで、再びビデオ店に歩き出す。帰ったらまた宿題しなきゃいけないなあ、少し休んでもいいんじゃないかなあなどとだんだん内なる悪魔に飲み込まれそうになっていた佐天は、

突然、爆音と人々の悲鳴を聞いた。
「！な、なに……」
爆音は続き、悲鳴も大きくなってくる。突然の事態に驚いた佐天は、何が起こったのかとあたりを見回す。するとその目に、自転車やら自販機やら、様々なものが飛んでいるという情景が映った。近くにいる人は、みな叫びながら散り散りになって逃げていく。その騒ぎの中心に、一人の男が立っている。どうやらこちらに向かって歩いてくるようだ。
（あそこに立っている奴の仕業なの…？そんなことより、私も早く逃げないと……）
そう思った瞬間、佐天は見た。
近づいてくる男の進む先にいる、先程風船をとってあげた女の子を。

しりもちをついたまま、まったく動こうとしない。
（まさか、腰が抜けて……！！）
助けないと。そう思った佐天の脳裏に、ある考えがよぎる。
自分が行って、何か出来ることがあるのか？男と女の子の距離の方が、自分と女の子の距離より近い。向こうは歩いているので走ればギリギリ間に合うかもしれないが、それでは彼女を連れて逃げる時間がない。しかも騒ぎを起こしている男は、どうみてもある程度の能力を持った者だ。無能力者である自分がなにをやっても意味は……
「それでも…やっぱり！！」
佐天は走り出した。女の子の方へ向かって。
「私にも、何かできることがある！！」
思い出されるのは、とある少年の言葉。どんな人間にも、きっとできることがあるはずだ。そう彼は言っていた。女の子の方へ近づいていくに連れて、彼女の恐怖に震えている表情、その彼女に迫る男の狂気に満ちた表情が見えてくる。女の子との距離が5メートルくらいになったところで、
「……なんだ、お前？」
男が佐天に気づいた。高校生くらいだろうか。そこそこしっかりした体つきをしている。
「あ…さっきの……」
女の子もこちらに気づいたようだ。何か言おうとしているようだが、うまく呂律が回らないらしい。
「その子に手を出さないで」
こちらも同じく恐怖で声が出なくなりそうだったが、何とか佐天はその言葉を言い切った。それと同時に、佐天は女の子に近づいていく。
「あん！？お前、そいつの姉かなんかか？」
「…違うわよ」
そう答えると、男は鼻で笑い
「はっ！ってことは何か、お前他人のためにわざわざ俺の方へ向か

ってきたのか？とんだお笑い種だ　　な。この騒ぎ見りゃわかるだろ？答えはノーだ。俺は何もかもめちゃくちゃにしたいんだよ」
と言った。
「そんな、理由もないのにこんなひどいことを……」
「なんだ？そう思うんなら俺を止めればいいだろ、お前の力で。…お前、レベルはいくつだ？」
男は余裕を持って言う。何とかして女の子を連れて逃げないと、と思いつつ、とりあえず答える。
「…ゼロよ」
すると男の表情が笑みになる。
「ゼロ！？さっきからガタガタ震えてるからたいしたことはねえと思ってたが、まさかゼロとはなあ。　何もできないくせに、よくこんなところに来たもんだ。それで、お前は大能力者の俺に対して、これ　からどうするつもりなんだ？」
男の手がこちらに向けられる。
（……どうしよう）
相手は学園都市の中でもひとにぎりしかいない大能力者。何も打つべき手立てがない。どうやっても、自分とそばにいる女の子を逃がすことは……
恐怖で汗が大量に噴き出し、表情もどんどんゆがんでいく。体の力も抜けてしまう。そんな佐天の様子を見て、男は満足そうな顔をすると、
「それじゃあ、そろそろ痛い目見てもらうか」
そう言って、佐天と女の子に向けてエネルギーの塊を飛ばしてきた。
（だれか……だれかたすけて）
目を閉じた佐天は思わずそんなことを考えていた。しかし同時にこうも思っていた。助けなど来ない、と。

しかし。
「うおぉぉぉっ！！」

叫び声と同時に、強い衝撃が横から来て、そして地面とぶつかる。
しかしそれだけだ。自転車や自販機を吹き飛ばすほどの衝撃は、来ない。
目を開ける。
「てめぇ……こいつらに何するつもりだった！！」
まるで特別（ヒーロー）な存在のような最高のタイミングで、上条当麻は現れた。

5．大神祐樹の暴走（後書き）

遅くなりましたがあけましておめでとうございます。
あと2年で受験なんですがどうしましょう。

（初めにお読みください）　設定・登場人物

設定について説明不足だとコメントしてくださった方がいるので、今更かもしれませんがこの小説の設定・用語について説明したいと思います。

学園都市…人口の八割が学生の、学生相手に超能力を開発している都市。東京都の三分の一を占める。技術は非常に発展しており、学園都市の中と外では二～三十年の開きがあるらしい。学生の数は約二三〇万人。統括理事会というものが都市を治めており、理事長のアレイスター・クロウリーがトップであるが、彼については謎に包まれている。

超能力…理論的には、ありえないことをありえると思い込むことによって「自分だけの現実（パーソナルリアリティ）」を作り出すことで手に入れることができる。当然個人差があり、まったく能力が発現しない者から恐ろしい能力を手にする者までさまざまである。二つ以上の能力を同時に持つことは不可能。

以下に能力の強度の段階を示す。

無能力者（レベル０）…ゼロとは言うが、全員が何の能力も持っていないわけではない。非常に微弱なだけである。学園都市の学生の六割を占める。

低能力者（レベル１）…多くの生徒が属し、日常ではあまり役にたたない。

異能力者（レベル２）…低能力者と同じく、日常ではあまり役にたたない。

強能力者（レベル３）…日常ではあったら便利なレベルであり、このあたりからエリートとみなされるようになる。

大能力者（レベル４）…テレポートなど、日常であったらかなり便利なレベル。戦闘でも軍事的価値がある。

超能力者（レベル５）…学園都市に七人しかいない。一人で軍隊と戦えるほどらしい。

風紀委員（ジャッジメント）…いわゆる、「学生による治安を守るボランティア」である。町の掃除から能力者による事件の取り扱いまで、様々な種類の仕事をこなす。

警備員（アンチスキル）…風紀委員の教師版。教師達は能力者ではないので、場合によっては武装することもある。

登場人物

佐天（さてん）　涙子（るいこ）

学園都市に住む無能力者。中一。性格は明るく、友人の初春飾利のスカートをめくるのが趣味。

上条（かみじょう）　当麻（とうま）

学園都市に住む高校一年生。異常なまでに運が悪く、よく不幸な目に遭う。無能力者であるが、実は…

初春（ういはる）　飾利（かざり）
佐天と同じクラスで、友人。低能力者で、風紀委員に所属している。

インデックス
事情があって上条の家に居候しているシスター。非常に食べることが好き。

御坂（みさか）　美琴（みこと）
学園都市で第三位の実力を持つ。上条にはある事件で助けてもらって以来、好意めいたものを感じているが、御坂本人は否定している。

白井（しらい）　黒子（くろこ）
御坂の後輩でルームメイト。大能力者であり、風紀委員にも所属している。御坂に対しては百合めいた感情を抱いている。

青髪ピアス（あおがみ　ぴあす）
上条のクラスメイト。重度のオタク。

土御門（つちみかど）　元春（もとはる）
上条のクラスメイト。シスコンでロリコン。

吹寄（ふきよせ）　制理（せいり）
上条のクラスの委員長。真面目な性格。

月詠（つくよみ）　子萌（こもえ）
上条のクラスの担任。なぜか小学生のような体型である。

大神（おおがみ）　祐樹（ゆうき）

オリジナルキャラ。高校一年生だが、現在は不登校。大能力者である。

6．幻想殺し

「てめえ……こいつらに何するつもりだった！！」
上条当麻はそう言いながら、目の前にいる男・大神祐樹をにらみつける。もし、自分が佐天達に飛びつくのが少しでも遅れていたらどうなっていたのか。そう考えるだけで、男への怒りが沸いてきた。
「か、上条さん…どうしてここに……」
佐天が目を開け、こちらに顔を向ける。隣の女の子も、何が何やら分からないような様子をしている。
「スーパーが安売りしてたから、気合入れて買い物して外に出たらこの有様だ。買ったものもどっかに　落としちまったし、本当に不幸だよ。……けど、間に合ってよかった」
すると男が馬鹿にしたような顔をして口を開く。
「おいおい、間に合ってよかったって、お前この状況わかってんのか？何もかもめちゃくちゃにしよう　と思っている、大能力者のこの俺から逃げられるほど、お前の能力のレベルは高いのか？」
大能力者。能力者の中にもわずかしか居らず、軍事的価値をも持つ。普通の人間なら、一撃を与えることすら難しい。
しかし、上条はまったく恐怖を感じていなかった。
「ゼロだよ、俺は無能力者だ」
臆することなく、言葉を発する。佐天の隣の女の子の表情が曇るのが見えた。現れた最後の希望が無能力者だとわかったのだから、当然だろう。佐天も、心配そうな様子でこちらを見ている。
「フフ……ハハハハハ！！こいつは傑作だ！小さなガキを助けに来たのは無能力者で、そいつを助けに　来たのもまた無能力者ってか！？クズはやっぱりクズと仲良しなんだなぁ！」
上条の答えを聞き、男が高笑いをする。しかし、笑ったことはどうでもいい。

クズだと？
「おい…誰がクズだって？」
怒りを殺したような静かな声で、上条が言う。
「お前らに決まってるだろ。世の中力が全てのくせに、お前らみたいな無能力者は弱い、力が無い。
力が無いやつは何もできない！それをクズと呼んで何が悪い？」
男はさも当然のようにそう言った。その言葉には、単に相手を見下す感情だけでなく、それ以外の何かが含まれていたのかもしれないが、上条には知る由も無かった。足を動かし、佐天と女の子の前に立つ。
「いいぜ……」
上条当麻ははっきりと言える。一緒にいた時間がわずかでも、それくらいのことは分かる。
佐天涙子は決してクズなどではない。何もできないわけが無い。
「お前は、俺の手でぶっ飛ばす！！！」
だから、そんなことを言ったやつの幻想（たわごと）は、絶対に殺してみせる。
「ぶっ飛ばすだと？なら、こっちがそうしてやるよ！」
上条の言葉にいらだった男は、先程佐天達に向かって撃ったのと同じ光弾を飛ばしてくる。しかし、上条は一歩も引かない。
「……なに？」
男が驚きの声を上げる。それもそのはずだ。目の前の馬鹿な無能力者に当たるはずだった光弾が、バギン、という音とともに消え去っ

たのだから。
「お前、無能力者じゃ……」
「無能力者だよ」
男の疑問の声を、上条は途中で遮って言った。
「ただし、ちょっといわくつきだけどな！」
上条は、目の前の男に向かって走り出した。

6．幻想殺し（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
さあ、こっからどうしよう…バトル描写を書ける気がしない……
まあ、がんばっていこうと思うので、暇な人は感想でも書いてくれると嬉しいです。

7. 無能力

相手の光弾を打ち消し、あるいは避けたりしながら、上条は少しずつ男に近づいていく。
「くそ、なんなんだ……確かに何発か当たっているはずだ」
男が焦った声を出すのを聞いて、上条は勝算が十分にあると感じていた。
（奴の攻撃……確かに威力はあるだろうが、避けられない速度じゃない。このまま凌いで、隙が出来れ　ばぶん殴る！）
能力にはスタミナ切れというものがある。力を使いすぎれば、必ずツケがまわってくる。そのことは、無能力者の上条でも知っていることだった。
「大能力者……確かに一握りの連中しかなれないものかもしれねえが、こっちは日頃超能力（ビリビリ）者に追っかけまわされてんだよ！」

うかつに動くのもためらわれ、とりあえず女の子をかばうように立っていた佐天は、目の前の光景に驚かざるを得なかった。明らかに男の攻撃は上条に当たっている。周りの有様を見れば、あれの威力が相当なものなのは間違いない。
にもかかわらず、上条は少しも痛がる素振りを見せない。相手の男も危険を感じたのか、距離を取ろうと後ずさる。
「上条さん、あの……大丈夫なんですか？」
当然の疑問が口を突いて出てくる。上条はちらっと佐天の方を向くと、
「…俺の右手は、あらゆる能力を打ち消す力を持ってる。能力検査

じゃ何の反応も出さないから、無能　力扱いだけどな。だから心配すんな、あいつは俺がぶっとばす！」
と言うと、すぐに男のほうへ向き直った。

（あらゆる能力を、打ち消す……？）
思い出されるのは、いつか都市伝説を取り扱ったサイトで見た、『どんな能力も効かない男』というわさ。今、その都市伝説の本物が目の前にいるのだ。
そんなすごい能力を持っているなんて。
確かに上条の言った通り、能力検査では無能力判定なのかもしれない。そんなとんでもない能力があるとはっきりわかっているなら、都市伝説では済まないしだろう。風紀委員の人間でさえ、そんな能力があるはずがないと言っていたのだ。

だから、彼の言葉に嘘はないのだけれども。

（上条さんも、特別な力を持った人間だったんだ……）

だけど、佐天は虚脱感を感じてしまっていた。
自分を元気づけてくれたあの言葉も、彼に力があるから言えたのではないのか。そう考えてしまうと、
再び自分に自信が持てなくなって来る。

「お姉ちゃん……お兄ちゃん、大丈夫だよね……？」
後ろにいた女の子が、不安そうな顔で聞いてくる。目にはうっすらと涙も浮かんでいる。

「きっと大丈夫だよ。あのお兄ちゃんには、すごい力があるんだから……」
それは嘘でもなんでもなく、思ったことを言っただけだった。事実、

上条は大能力者の男に対して優勢に立っているのだから。
しかしその答えは、どこか投げやりなものだった。

どんどん近づいてくる男に、大神は明らかに焦っていた。何せ相手はこちらの攻撃を防いだ上で進んでくるのだ。しかも、その仕組みもわからないとなれば……
（いや、待てよ……奴は全部、俺の光弾を避けるか、右手に当てている。ということは、攻撃を防げる　のは右手だけ……、っ！？）
おそらく相手の能力がわかり、少し焦りが消えたのもつかの間。

「なっ……！」
考えることに気を取られ、攻撃に隙が生まれていた。いつの間にか、男が目の前まで来ていたのだ。
とっさに後ろに下がろうとするが、
「おっせえ！！」
顔面に拳が叩き込まれ、大神は後ろに吹き飛ばされた。一瞬意識が飛びかけたが、すぐに立ち上がり、男をこれ以上近づけないために光弾を打ち込む。足を止めることはできたが、全て避けるか防がれていた。

「くそ……なんなんだ」
女と子供が傷つけられようとしたところに颯爽と現れ、戦っている目の前の男。

まるでそれは、ヒーローのようではないか。

誰かを守るための力を持ち、実際その手で誰かを守ろうとする。

その姿は、昔の自分にそっくりで。

「……気にいらねえ！！」

どうしても、ぶっ壊したいと思った。

「何だと……！」

目の前の男が驚きの声を上げる。それもそのはずだ。

大神の体は浮かびあがり、地上からでは手の届かない場所に達していたのだから。

「さあ…俺の本気を、見せてやるよ！！」

大神は、勝ち誇ったような顔で、不敵に笑った。

7．無能力（後書き）

遅くなりましたが次話投稿です。冬休み明けたら忙しくて……

（０Ｍ０）オデノカラダハボドボドダ！

元ネタがわからなかったらスルーしてください。それではこれからもよろしくお願いします。

8．強き者

「な……」
上条はいきなり目の前の男が浮かび上がったことに驚いた。もう拳が届く位置ではない。しかし、自分の武器はこの拳しかない。
「ほらほらあ！ボーっとしてんじゃねえよ！」

そこに、空中から光弾が降り注ぐ。
「くそ、マジかよっ！」

右手だけでは防ぎきれず、横っ飛びでなんとかかわす上条を見て、
「それがいつまで持つかな？」
男はさらに光弾を上条に向かって打ち込む。先程までより撃ってから次を撃つまでの間隔が短くなっている。

（あの野郎……今まで本気じゃなかったのか？とにかく、何とか突破口を開かねえと……うわっ！）
「ははは！さっさとくたばらせてやるぜ！！」

右に、今度は左に。
容赦なく襲い掛かる攻撃を、何とか紙一重のところでしのいでいる上条の姿を、佐天はただ見ているだけしか出来なかった。状況はさっきと打って変わって圧倒的に不利だ。
「お姉ちゃん……」
隣の女の子が目の前の光景を見て心配そうな声を出す。小さい子の目にも、今の上条は光弾を避けるだけで精一杯に思えるようだ。
「大丈夫……（早く風紀委員か警備員が来てくれれば…）」
今はこの子の隣にいてあげるしかできない、そう思い、祈るように

上条の方に目を向けたとき、佐天は見た。
目に写った上条の姿は、少し目を話していた間にぼろぼろになっていた。光弾にかすったのだろうか、
服には血もにじんでいるように見える。しかし。
（何で……）
上条の目には、不思議なほどに光が宿っていた。
まったく勝つことをあきらめていないような、そんな鋭い目つきだった。

「がはあっ！」
上条の右肩に光弾がかする。これでもう何回目だろうか。やはり大能力者の力なのだろう、完全に当たってはいないのに高熱が神経を襲い、血が流れ出す。
体力は徐々に奪われ、足取りもおぼつかなくなってくる。それでもまだ、上条はあきらめていなかった。

「くっ……くそ、とっとと……くたばれよ！」
空に浮かんでおり、絶対的に有利であるはずの男は、なぜか息をきらしていて、額には汗が浮かんでいるようにも見える。
頭はだんだん働かなくなってきたが、その様子から上条はひとつの仮説を立てていた。
（…やっぱり、多分そうだ。俺の考えが正しければ…この勝負、まだわかんねえ！）
傷ついた体に鞭を打ち、降り注ぐ光弾を打ち消し、あるいはかわす。

体が地面にこすれても、攻撃がかすって服が裂けても、致命的な一撃だけは食らわない。並の人間よりはずっと場数を踏んでいる上条だからこそ、ぼろぼろになっても耐え凌ぐ戦いをすることが可能だった。

「……すごい」

佐天の口から出た言葉はそれだった。本当に、自然とそういってしまったのだ。

それだけ、目の前で戦っている少年から強い気迫を感じたのだった。そして佐天は気づいた。上条当麻という少年は、決して特別な右手があるから強いわけじゃない。もちろんそれもあるだろうが、彼の強さの根底は、そこではない。

「どんなに傷ついても、絶対あきらめない……あの強さがあるから、あんなこと言えたんだ」

状況は不利に思えるが、それでも、彼なら何とかしてしまいそうだ。そう佐天は感じていた。

「…何でだよ。何でまだ立ち上がるんだよ」

大神が放った攻撃を避けるために地面に突っ込んだ、体は傷だらけでまともに動けないはずの男。今度こそ終わった、そう思う大神の心を、容赦なく裏切る。こちらをにらみつけるその瞳には、一切の濁りが感じられない。

本当にどうして、この男は倒れないのだろう？
その答えは、なんとなくわかっていた。

――あの二人を、守るため。
そのために、奴は戦っている、そう大神には感じられた。
その瞬間、自分と戦っているこの男が、とても大きく感じた。誰かを守るため、ただそれだけのために拳をふるうことができる。自分はそんな人間に――

「だからって、今更どうしろっていうんだよ！」
いつの間にか、自分の体がどんどん地面に向かっているのに気づく。なんとかして再び上昇しようとしたが、やはりそのまま地に足が着いてしまった。

「……ようやくスタミナ切れか…。やっぱり、体を浮かすのには結構な体力が必要だったようだな」
男が息を切らしながら言う。そう、その通りだ。だから最初から使わなかった。そんな能力の使い方をしたまま、さらに無理をして激しい攻撃をすれば、能力のスタミナが切れるのは時間の問題だった。

「ああ、そうだよ。だから決着を急いだっていうのに、お前が……」

「何でだよ」
「は？」
男の言葉の意味がわからずに思わず聞き返す。

「何で、そんなすげえ力を持ってるのに、それをこんなことに使っちまうんだ。その力があれば、壊す　んじゃなくて、誰かを守る事だってできるんじゃないのかよ！」
男は、そう言った。

思い出されるのは、昔の自分。

――俺が、お前を守ってやる――

「何がわかる……」
「何？」

「お前に、何がわかるんだよ！！」
大神は、無意識に声を荒げて叫んでいた。

8．強き者（後書き）

次回、このバトルはたぶん完結です。

行間？

――一年前。

「ったく、あの眼鏡教師、何考えてんだ。少し校則破ったぐらいで、どうして一時間も説教食らわなき　ゃなんないんだよ」

そんなことをつぶやきながら、大神は校門を出て、家へと足を進めていた。今日の授業中、周りの席の者達とこっそりゲームをしていたところ、ささいなことから口論になり、ヒートアップしているうちに騒がしかったために教師に見つかってしまったのである。

そこから担任（生活指導もやってる）に話が伝わり、放課後お叱りを受けていたと言うわけである。

「最近あんまり能力のほうも伸びねえし、なんかやな感じだな～」

そうは言っても、彼の能力は強能力者というレベルに達しており、大体の者からはうらやましがられる程度のものなのだが。

友達としゃべったりするために学校に行き、時には決まりを破って教師に叱られる。

大神祐樹とは、そんな普通の中学生だった。

「ん……？」

大神は目にちらっと写ったもののために、動かしていた足を止める。十メートルくらい先。見知った顔が、四、五人の男に囲まれて、通りのわき道に入っていくのが見えた。

「美穂……？――まさか！！」

それは、小学校の時知り合い、以来妹分のようになっていた朝井美穂だった。彼女は無能力者だ。もし、今の男達が彼女に危害を加え

ようとしているなら、彼女は何もすることもできず……

気がつくと、大神は走り出していた。そんなことをさせるわけにはいかない。美穂達が入っていった曲がり角までたどり着くと、そのわき道へ入っていく。少し入り組んでおり、そのことが大神を焦らせた。

「…いや！離してください！」

その時、あまり大きくは無いが、美穂の叫び声が聞こえた。

「美穂！！」

声のしたほうへ走ると、そこには七人ほどの不良たちに囲まれ、今にも襲われそうな美穂の姿があった。

美穂のほうも大神に気づいたようで、

「祐樹君！？」

と声を出す。

「なんだあ？お姫様を助けに来たヒーローのおでましか？こいつは笑えるぜ。お前、一人で何しようっ　てんだ？」

不良たちは大神のほうへ向くと、ニヤニヤ笑いながらそう言った。

大神はそれには答えなかった。地面を蹴って美穂に向かって走りながら、周りの不良たちに自分の能力である光弾をぶつける。

「！？こいつ、結構なレベルの能力持ってんじゃねえか！」

不良たちは思わぬ反撃にひるみながらも逃げようとはせず、そのままこちらに向かってくる。数で押しつぶすつもりなのだろう。

「それでも、負けられるかよ！！」

「ここまで来れば大丈夫か……美穂、どこも怪我とかしてないか？」
大神は不良たちから美穂を取り戻し、近くの公園まで一緒に走ってきていた。その体には、たくさんの傷跡がついている。

「う…うう……ごめんね祐樹君。私のせいで……」
美穂が涙を流しながら言う。

「謝ることなんてないだろ。悪いのはあいつらだ。お前は何もしていない、そうだろ？」
「で、でも…そんなに怪我しちゃって」
大神の言葉を聞いても、美穂はやはり自分が悪いと思っているようだ。自分のせいで、彼が傷ついてしまったと……。

（そんなことはない）
美穂には責任など無い。なのに、彼女は優しいから、大神が傷ついたのは自分のせいだと感じている。
俺が怪我したから……。

「じゃあこうしよう」
しばしの沈黙の後、大神が口を開く。

「俺が強くなる。強くなって、怪我なんてしなくても、お前を守れるようになる」

「え？」
美穂が驚いたように言う。
「だからもう泣くな。絶対に、俺がお前を守ってやる」

「祐樹君……ありがとう」

ようやく、彼女は笑顔を見せた。

この笑顔を、ずっと守っていきたい――そう、思っていた。

「事故！？」

しかし彼の願いは、ある日突然叩き壊された。

「ええ……トラックに撥ねられて……ううっ」

美穂の姉の声が受話器を通して聞こえてくる。その言葉の意味を、すぐには理解することは出来なかった。

「どこの病院ですか！すぐに行きます！！」

人生で一番急いだと言ってもいいくらい、全力で病院に向かった大神を待っていたのは、過酷な知らせだった。

「意識が、戻らないかもしれない……？」

美穂の病室であっけに取られる大神に、彼女の姉が言う。

「…ええ。お医者様の話だと、頭を強く打ってて……目を覚ますかどうかって……」
そう語る彼女の顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。
そばにあるベッドに寝ている美穂の姿を見る。普通に眠っているだけのようにも見えるのに、
もう、彼女は目を開けてくれないかもしれない？
「そんな……嘘だろ……？俺、お前を守るために、大能力者にまでなったんだぜ？お前を守りたいから、強く……。なのに……俺は、これからどうしたらいいんだよ？」

大神祐樹という少年は、朝井美穂という少女を守るために、力を求めた。強くなろうとした。
だが、その少女を守れなかったとき、力をどう使えばいいか、わからなくなってしまったのだ。

それから彼は、夜の裏路地をぶらぶら歩くようになった。美穂の意識はいまだ戻らず、今はただ自らの力を憂さ晴らしに使うことしかしていなかった。

行間？（後書き）

まず一言、すみません。
次回でバトル完結といっていましたが、よく考えたらこの話をいれないといけないということをすっかり忘れていまして……
次回こそはバトル完結ですので、どうかよろしくお願いします。

9. 決着

「俺だって…最初はそうだった」

目の前で対峙している男の独白を、上条は静かに聞く。

「自分の能力で、大切な者を守りたい。そのために、強くなろうとした」

「……」

「だけど、その大切な者は…美穂は、事故に遭っちまって意識が戻らないままなんだよ！医者も、もう　二度と目を覚まさないかもしれないって……！！だから、俺はもう……！」

それから先は、言葉にならないようだ。手を震わせながら、目には涙も浮かんで見える。

「……なるほどな」

大体の事情はわかった気がする。どうしてこの男が暴れているのか。言葉にできなかった部分に、どんな感情が込められているか。

「ひとつ、言わせてもらっていいか」

だけど、いや、だからこそ、上条は言わなければいけないことがあると思った。もちろん、今日初めて会って、しかも戦っている相手のことを全てわかっているわけではない。今から自分がやることは、他人の心に土足で踏みいることかもしれない。しかし、それでも上条は、そんな生き方をしてきたのだ。

「だったらなおさら、お前はこんなとこで何やってんだよ。なんの罪も無い人たちを傷つけて！お前そ　の子を守りたいって思ったんだろ？だったらその思いはまだ潰されてなんかいねえ！医者が駄目かも　しれないって言っても、お前だけは信じてやらなくちゃいけないだろうが！！そばにいてやらなくち　ゃいけないだろうが！！」

自分の意志を貫き通し、相手にぶつける。それが上条なりに考えて出した答えなのだ。

目の前の男も、上条の言葉に激昂する。

「知った風な口を聞くな！！お前に何がわかる！俺の気持ちの何がわかるんだよ！！そんな簡単に言い　やがって……！」

「確かにな」

男の言葉を遮って、上条は言う。

「確かに、どこの馬の骨ともわからない俺の言うことなんて、あてにならないだろうな。

……だけど、お前はどうなんだよ？」

「何？」

男の表情が変わる。

「お前がここまで来てまだわかってないんなら、俺はお前をぶん殴って、警備員にでも引き渡すさ。

だけどそうじゃないだろ？お前、本当は自分が何をしなくちゃいけないか、何をしたいか、全部わか　ってんだろ？」

男の表情がさらにひきつる。自分の本心を突かれて、動揺と怒りがこみあげてきているような、そんな表情になり、

「う、うるさい……うるさいんだよおおぉ！！！」
こちらに向かって突っ込んできた。もう能力はまったく使えないのか、それとも使う気が無いのか。

「…なら、少し、頭を冷やしやがれ！！」
対する上条もまっすぐ走り出す。己の右手に、すべての力を込めて。

両者の拳が交錯する。
どちらも、戦いで疲労しきった状態での、最後の一撃。しかし、一方は自らの大能力で戦ってきた者。
一方は、いつも自分の拳だけを信じて戦ってきた者。

倒れたのは、片方だけだった。

9．決着（後書き）

はい、というわけでバトル終了です。ていうかこの話、佐天さん出てませんね…

まあ、次の話はこのバトルの後処理をしなくちゃならないので、佐天さんいっぱいしゃべると思います。三月には原作二十巻も出るので楽しみですね。というわけで、また次回。感想や評価のほうも、気が向いたらでいいのでお願いします。

10．AFTER　BATTLE

「ハァ、ハァ……終わった、か」

男が倒れたまま起き上がらないのを見て、上条はようやく気を緩めた。

その瞬間、全身の力が抜けて、思わず地面に倒れ伏してしまう。

「ぐっ……」

「上条さん！」

その姿を見た佐天が、焦って上条に駆け寄る。

後ろには彼女と一緒にいた女の子もいる。

ああ、よかった。

彼女達を、守りきれた。

「大丈夫ですか！？…！こんなに血が……すぐに病院に行かないと！！」

上条の体についている生々しい傷と血を見て、佐天は救急車を呼ぼうと急いで携帯電話を取り出そうとする。

「あ…いや、その必要はねえよ」

「え？」

「あんだけ暴れまわったんだ。もうじき警備員達が来るさ。それまで、この場を離れないほうがいいからな。……それに、言わなきゃいけないこともある」

数分後。

「あ！来ましたよ！」

遠くから警備員が何人かやってくるのを見て、佐天が上条に声をかける。

「あ、ああ……よし」

そう言って上条は起き上がろうとするが、なかなか体が思うように動かないようだ。

「手伝います。さ、私に掴まってください」

上条に手を差し出す佐天。

上条もさすがに一人では立ち上がれそうもないので、

「悪いな。おっかしいなあ、痛みはないんだけどなあ」

と言って手を掴み、足を立てようとする。

（それって結構やばいんじゃ……）

「このっ、動け……」

「よいしょ〜〜！」

当然、力が入らない上条を立ち上がらせるには佐天がしっかり支えなければならない。

なので、ちょっとした拍子で、

（あれ……？この感触……まさか！？ＢＡＳＴ？ＢＡＳＴが触れちゃってる！？）

上条の体に佐天の胸が当たることになってしまう。焦る上条だが、佐天は気づいておらず、なんとなく、というか非常に言いづらい。

（というか、確かこいつ中一だよな……まったく、どうして最近の子はこんなに発育がいいんだ……！）

「ふう。なんとか立てましたね」

「あ、ああ……ソウダネ」

「？」

なんだか上条の様子が変だが、女性の警備員が大丈夫かと言いながらこちらに向かってきたので、そちらに注意を向ける。

「君達、大丈夫……って、子萌先生とこの少年じゃんか」

「黄泉川先生」

どうやらこの人は上条と知り合いらしい。彼の学校の先生なのだろうか。

黄泉川と呼ばれたその警備員は、佐天、小さな女の子と見て、最後に倒れている男を見ると、

「通報者の情報と一致してる…こいつがこの騒ぎの原因？」

と尋ねる。

「はい、そうです」

その問いに上条が、男を複雑な表情で見ながら答える。

「そう、じゃあ捕まえてたっぷり事情を――」

「待ってください」

と、上条が突然口を挟む。

「身柄を拘束するのは、ちょっと待ってもらえませんか？」

「上条さん？」

上条の口から飛び出した言葉があまりに予想外だったので、思わず声を出してしまった。

黄泉川も意外そうな顔をしている。

「どういうことじゃん？少年」

「こいつには、行かなきゃいけないところがあるんです」

「行かなきゃいけないところ？」

黄泉川が繰り返す。

（「――そばにいてやらなくちゃいけないだろうが！」）

もしかして、と、佐天は上条の言いたいことに思い当たる。

「こいつを必要としている人がいるんです。その人のために、こいつはそばにいなきゃならない。だから、こいつが目を覚ましたら、行きたい場所に連れて行ってやってくれませんか？もちろん、無理を言ってんのはわかってます。だけど、見張りでもなんでもつけていいですから、それだけは……」

そう言って、頭を下げる。

先程まで戦っていた男が抱えていた悩み。

それのために、上条は今頼み込んでいるのだ。

やっぱりすごい人だ、佐天はそう感じた。

「頭あげるじゃんよ」

黄泉川が口を開く。

「結構無茶言ってるけど……子萌先生の教え子にここまで言われちゃしょうがないじゃん。この男にはとりあえず監視をつけるだけにするじゃんよ」

「あ、ありがとうございます！」

そう礼を言う上条の表情は、本当にうれしそうだった。

「じゃあとりあえず……そこの少女」

「はい？」

突然声をかけられたので、少々焦る。

「怪我がないようなら、ここらで何が起こったのか説明してもらうために来てほしいじゃんよ」

「あ、はい。大丈夫です」

「そこの女の子は、妹？」

「いえ、そんなんじゃなくて、偶然この子が襲われそうになってるのを見て……」

「そう。なら、その子は私達で家に送っとくじゃん。君、おうちまでの道、わかるじゃんか？」

「うん」

女の子は少し恥ずかしそうにそう言った。

「よし！……ところで少年、大丈夫じゃんか？」

「へ？何がです？」

黄泉川の言葉に不思議そうに答える上条。

「何がって……その出血量、早く処置しないと大変じゃんよ」

「え？でも、別に痛みとかは……」

そう言った上条に、黄泉川は痛烈な一言を浴びせる。

「そりゃあれだ、出血が多くて痛覚がなくなっちゃってるじゃんよ。今救護班呼ぶから、頑張るじゃんよ～」

「へ？それって危険なんじゃ……げ、そう言われたら意識が遠く……」

「う、うわああ！？？上条さん！大丈夫ですか！？あ～～、やっぱりこの怪我やばかったんだ～～！」

「まったく……本当に、あの先生はいい教え子を持ってるじゃん」

１０．ＡＦＴＥＲ　ＢＡＴＴＬＥ（後書き）

今回から文章と文章の間を増やしてみましたが、どうでしょうか？
ていうか黄泉川先生しゃべり方難しすぎる！さっぱりわかんないのでめちゃくちゃになってます。すいません。
さて、とりあえず次回で区切りはつくはずです。残りは少し後日談を書くだけなんで。というわけで、次もよろしくお願いします。

作者のひとりごと（前書き）

更新が途絶えているのは、期末試験が差し迫っているからです。来週の半ばまでは試験があるので、とりあえず生存報告もかねて思いついたことを適当に書くことにします。

作者のひとりごと

禁書目録２０巻、発売ですね。まあ、上にも書いたように試験があるので、僕が買うのはまだ先ですけど。ようやく「転」に入ったかな、という感じなので、期待しています。

感想を書いてくださった方への返事でも書きましたが、この「とある二人の無能力者（レベル０）」

を書こうと思った理由が、上条さんがまじぱねえっすな話を書きたいなあと考え、それじゃあ原作じゃ絡みがない佐天さんと組ませるか、というふうになったからなんですね。

だから、「物語の構成ってなんだ？」「伏線ってなんだ？」というような、言ってしまえばなにも考えずに書いている作品なので、まさかポイントが２６０まで行くとは思ってもいませんでした。

これも上条さんと佐天さんの人気のおかげです（笑）

……ところで、上条さんの誕生日って、公式に発表されましったけ？そうじゃないなら、僕は2月１４日を推したいです。みずがめ座にあてはまりますし。

というか、原作はたぶんそこまで続かないだろうな……

……こんなくだらないことを書いている暇があったら続きかけ！という声が聞こえてきそうですが、一応次が最終回みたいなもんですし、やっぱり休み入ってからきっちり書きたいんです。許してください。

それに、一応用件ならあります。次の作品についてです。これが終わったら次は仮面ライダーディケイドか禁書目録かどっちかを書こうと思っています。

それで、禁書目録を書く場合、どんな話にするかということです。

ちなみに作者は発想力が皆無なので、ある事件を主軸にしたような話は書けません。

今、頭の中で思いついてるくらいでは、

・上条と美琴

・上条と妹達

・上条と姫神

・上条と黒子

・上条と吹寄

・できるだけキャラ出してドタバタ

ですかね。上条さんばっかなのは置いといてください。

こんな感じなので、もし希望とかあったら感想で伝えてください。

その通りになるかはわかりませんが。（ていうか、そもそも誰からも来ない可能性が高いですが……）

とりあえずはこの作品を３００ポイント目指してがんばって仕上げていきますので、よろしくお願いします。感想や評価、お気に入り登録などは作者の活力につながりますので、気が向いたらお願いします。

11．ヒーロー

「……ん」

「あ！目、覚めましたか」

取調べを終えた佐天は、すぐに上条の運ばれた病院に駆け込んだ。

それから三十分後、ようやく上条の意識が戻ったのだった。

「…今、何時？」

「もう、夜の七時過ぎちゃってます」

上条の質問に佐天がそう答えると、急速に上条の顔が青ざめていく（もともと顔色はあまり良くなかったが）。

「あああ…やばいやばいやばい！あの暴飲暴食シスターを空腹のまま放っておくのは非常にまずい！」

「あ、あの…どうかしましたか？」

「え？あ～、いや、なんでもない」

その返答から、明らかになにか隠しているのはわかったのだが、深入りしないでおこうと佐天は感じた。

彼にもいろいろあるのだろう。

「それで、あの後どうなったんだ」

少し間をおいて、何とか落ち着きを取り戻したらしい上条が聞く。

「暴れてた人は、警備員の人たちが連れて行きました。ちゃんと、上条さんの言ったとおりにしてくれるって言ってました。私と一緒にいた女の子も、ちゃんと家まで送ってくれたそうです。私は、あの後色々事情を聞かれて、ここに来たのはついさっきです。……あ、あと、あの事件、怪我人はいるけど、死者は出なかったらしいですよ」

三十分をついさっきと言うかは微妙だが、上条の寝顔を見ていたらあっという間に時間が経っていたので、そういうことにしておく。

それを聞いた上条は、

「……そっか」

と言って、顔をほころばせた。

みんな、とりあえずは大丈夫だったことを喜んでいるのだろう。

もちろん、加害者のあの男のことも含めて。

「やっぱり、上条さんはすごいですね」

「へ？」

佐天の言葉に、間抜けな声を出す上条。

そんな彼に、佐天は自分の気持ちを伝える。

「私は何もできなかったのに、あのタイミングで迷わず助けに来てくれて、そしてあの状況で勝っちゃうんですから。本当に格好よくて、私…その……惚れちゃいました」

上条は、驚いた顔で佐天を見る。

勢いに任せてとんでもないことを言ってしまったと、みるみる自分の顔が赤くなっていくのを佐天は感じた。

沈黙。

そして、上条が口を開く。

「いやあ、惚れちゃったなんて、お世辞ってわかっててもうれしいよ。サンキューな」

（えええぇ〜〜〜！！あんだけ時間ためといて誤解しちゃってる

～～～！？）

今すぐ訂正しようとするが、一度羞恥を覚えた心は、それを許してくれない。

しばし口をぱくぱくさせていると、

「でも、佐天だって、大事なことやってたじゃないか」

上条が言葉を続け始めた。

「あいつが言ってたけど、お前、あの女の子をかばうために、あいつの前に立ったんだろ？」

「…ええ、そうですけど」

「お前がそうしなかったら、俺はあの子を助けられなかったかもしれない。……あの子、お前にお礼言わなかったか？」

「いえ……ありがとうって……笑顔で」

「だろ？あの子にとって、お前はヒーローなんだよ。もっと胸張っていいんだぞ」

また。

また、元気づけられた。

優しい人だなと思うと同時に、少しだけ、気持ちを伝える勇気が湧いてきた。

今の言葉、見方を変えれば、

「じゃあ、上条さんは私のヒーローですね！」

「うぇぇ！？いや、それとこれとは別で……」

「あ、駄目ですよ～、自分の理論を自分にだけ当てはめないのは。ピンチの私を助けてくれたんですから、あなたは私の……」

「と～まぁぁ～～……」

そのとき不意に、病室の扉のほうからどす黒い声が聞こえてきた。見ると、いつの間にか扉が開いていて、そこに修道服のような服を着た少女がいた。

見た感じ、外人っぽいのだが、

「ひいいっ！い、インデックスサン！？そうしてそんなに真っ黒なオーラを発しているのでしょうか？」

「わたしははらぺこなのにとうまがまたまたまたまた無茶して病院

送りになって挙句の果てに女の子と仲良くなってるからなんだよ～～！！」

ガブリ。

「んぎゃああぁ～～～！！やめてやめて！上条さんのライフはもうゼロなんですよ～～！！」

どうやら、上条とこの少女は知り合いらしい。

しかもこの様子を見ると、かなり親しいのだろう。

（はあ……これは、私の願いを叶えるには困難な道のりが待っていそうだなあ……）

「ってちょっとちょっと佐天！なんか自分の世界に入っちゃってそうだけどこっちを助けてくれーー！！」

こんな感じで、今日も上条当麻は「不幸（しあわせ）」だった。

１１．ヒーロー（後書き）

はい、というわけで、この話が一応暫定の最終回ということになります。
この後に後日談が入るので、全体の反省みたいなものはそのときに書きます。
大神についても書こうと思ってるので（ていうか書かなきゃいけないので）、ここまで読んで下さった方は是非、ご覧になってください。

そして、皆さんのおかげで、ポイントが３００を超えました。本当にありがとうございます。よ～し、次は４００目指してがんばるぞ～（多分無理）。

後日談1．side大神

永遠にも思える時間とは、このような状態のことを言うのだろうか。

とある病院の一室。

時計の針の音だけが聞こえるなかで、大神祐樹はベッドで眠っている少女を見つめていた。

隣には、見張りの警備員が座っている――確か、黄泉川と自分で言っていたような気がする。

自分が起こしたあの騒動から五日。

あれだけ暴れたのだから、本来は今ここにいることはできなかったはずだ。

しかし、ある男の申し出により、こうして監視つきではあるが、この場所にいることができている。

自分が一番いたい場所――朝井美穂のそばに。

「……美穂」

もうこの五日で何度目だろうか、大神は無意識に、眠り続ける少女の名前をつぶやく。

彼女がこうなってから、二ヶ月が経とうとしている。

（……その間に、俺はずいぶん変わっちまったな）

五日前まで、自分の心はめちゃくちゃだった。

悲しみ、後悔、怒り、そんな負の感情がぐちゃぐちゃに混ざり合っていた。

彼女を守れなかった自分を恨んだ。

何にも非がない彼女をこんな目に遭わせた世界を恨んだ。

守るべきものを失い、ただ暴れることしかできなかった。

そして、倒された。

自分を殴り飛ばしたその男は、自分が二人の少女に迫る中、突如現れた。

そして得体の知れない力で、こちらの攻撃を打ち消した。

……それでも、それだけなら負けはしなかったはずだ。

どれだけ傷ついても、立ち上がる。

それが何かの能力だったのか、あるいは……ただの精神力だったのか。

いずれにせよ、大神はあの少年に負けた。

右の拳を振るうその姿は、まるでヒーローそのものだった。

気を失い、目覚めた後。

『お前、本当は自分が何をしなくちゃいけないか、何をしたいか、全部わかってんだろ？』

胸の中にあったのは、最後に少年が放った一言だった。

（俺はここに居たい。そして信じる。あいつが目を覚ます、その時を）

今、大神の心にあるのは、ただ大切な人を想う気持ちだけだ。

ふと様子が気になり、隣をうかがう。

すると、おだやかな表情で美穂を見つめる、黄泉川の姿が目に写った。しかし、顔には少し疲れが見える気もする。

黄泉川はこちらの視線に気づいたようで、

「どうした？」

と尋ねてきた。

「いや、その……本当に、いいんですか」

「なにが」

「俺を、こんなところに居させて」

折角なので、ずっと気になっていたことを聞いてみる。

「こんなことしてたら、そっちも大変でしょう。確かに、こっちとしては嬉しいけど……」

警備員は普段は教師だ。

だから当然ふつうに忙しいわけで、その仕事の合間を縫って交替でここに来るのは、とても大変なはずだ。

「……私達は、教師じゃん？」

「は？」

「だから、子供たちの願いはできるだけ叶えたいと思っているじゃんよ。少年の気が済むまで、喜んで付き合うつもりじゃん」

そう言って、黄泉川は笑った。

……今までの監視役の人も、こうやって笑ってくれていた。
いい人たちだな――そう、心から思った。

「ちょっとトイレ行ってくるじゃんよ」
五分くらい経った後、黄泉川がそう言って病室を出て行った。
「……ちゃんと見張ってなくていいのかねえ」
今逃げようと思えば、簡単に実行できるだろう。
ずさんな監視に感じるが、裏を返せば、そんなことはしないだろうとある意味信用されているのかもしれない。

「……」
再びベッドの中の眠り姫に目を移す。
点滴で栄養は補給しているものの、やはり体は少し痩せてしまっている。
でも……
「…綺麗、だな」

栗色の髪に、白い肌。

今は生気をあまり感じられないが、それでも、十分に美しいと思えた。

そもそも、彼女は元からかなりの美人で――

「って、何考えてんだ俺」

少しひいき目に見すぎた気がする。

……これが、惚れた弱味ってやつなのだろうか。

それにしても、本当に、ただ眠っているだけで、今にも起きてくれそうな気がする。

そう、たとえば、栗色の髪を揺らしたりなんかして……

「え……？」

揺らしたりなんかして……

「今……」

髪が、揺れなかったか？

「美穂……？」

そっと、掛け布団をどける。

すると。

ビクン。

「あ……」

言葉にならない声が、思わず出てしまった。

なぜなら、右腕がかすかに動いたから。

「……美穂」

祈る。

ただ、祈る。

彼女が、再び目を開けることを。

「…！頼む！！」

そして、その強い、本気の想いは。

「……あれ…祐樹…くん……？」

彼女に、伝わった。

「美穂……美穂……くっ」

思わず、目から熱いものがこぼれ落ちそうになる。

「！祐樹君、どうしたの？というか、ここは……私…」

駄目だ、ここで涙を流してはいけない。

だって、一度流してしまったら、もうしばらくまともに話せそうもないから。

「いやーごめんごめん、ちょっと詰まってて……って、えっ？」

と、このタイミングでようやく黄泉川が戻ってきた。

「そっか。私、二ヶ月も眠ってたんだ」

美穂が意識を取り戻したと聞くと、医師がすぐにやってきて、大体の事情を説明した。

そしてその医師（と、なぜか黄泉川も）が退出したところで、美穂は確認するかのようにそうつぶやいた。

「ああ。でも、目が覚めて本当に良かった。本当に……」

「…祐樹君、ずっと側にいてくれてたの？」

「え？」

「…なんだか、そんな気がしたの。どう？」

生気が戻り、少し頬に朱が差し込んだ表情で、美穂がそんなことを聞いた。

「…ずっとじゃない。……だけど、この五日間は、できるだけお前の側にいた」

後ろめたいことが思い出されるが、顔には出さないで大神はそう答えた。

「やっぱり。じゃあ、私が目を覚ましたのも祐樹君のおかげだね。ありがとう」

「あ……」

やっと、見ることができた。

彼女の、極上の笑顔を、ふたたび。

これでもう、大丈夫だ。

「美穂」

「なあに？」

大神の言葉に、人懐っこい表情で美穂が答える。

それを見ると、決心がにぶりそうになるが、我慢しなければならない。

「俺さ、ちょっと、行かなきゃならないところがあるんだ」

「？」

不思議そうな顔をする美穂。

本当にこいつは…すぐ顔に出る。

「それでさ、しばらくの間、帰ってこれない」

「っ！そんな、どうして……」

「どうしてもやらなくちゃならないことがあるんだ。だから……頼む」

真剣な表情で、頼み込む。

美穂はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「必ず…帰ってきてね。今度は、私が待ってるから」

「ああ…約束する。……じゃあな」

「もういいじゃんか？別にもっとたくさん話してからでもいいじゃんよ？」

一緒に病院の廊下を歩きながら、黄泉川が問う。

「いえ、もういいんです」

「どうして？」

大神の答えに、納得が行かないようだ。

「あれ以上あそこに居たら、離れられなくなってたかもしれないし。それに」

「それに？」

「一日でも、いや、一分でも早く罪を償って、それから、今度こそ満面の笑顔であいつに会いたいんです」

今の自分は、罪を背負った人間だ。

もちろん、時間が経てばそれが消えるというわけではない。

それでも、できるだけ後悔を振り切り、けじめをつけてから、美穂との時間を過ごしたかったのだ。

二か月前となんら変わらない、いつもの日常を。

「なるほど。そういうわけじゃんか」

それを聞くと、黄泉川はうんうんとうなずきながらそう言った。

「だけど本当に、あの少年には感謝しなくちゃいけないじゃんよ」

そして、そう言葉を続けた。

「……まったくですね」

暴走していた自分を止め、さらにこうして美穂が目を覚ます瞬間にも立ち会わせてくれた、ツンツン頭の少年。

正直、感謝してもしきれないのかもしれない。

彼は今、どこでなにをしているのだろう？

後日談1．ｓｉｄｅ大神（後書き）

どうも、更新が遅れて申し訳ありません。その代わりと言ってはなんですが、今回少し長めなので、どうかお許しを。

さて、まずは後日談一本目はオリキャラ、大神祐樹の話です。なんだか底が浅い設定になっちゃいましたが、これが作者の限界です、ご容赦を。

次回は上条さんの話かな？というか早くアニメ二期の告知を……

それでは、今回はこの辺で。

感想や評価などは、作者の血となり肉となるので、気が向いたら書いてやってください。とても喜びます。

後日談2．side上条

朝井美穂が目を覚ましたその日。

大神祐樹が心の中で上条当麻に礼を言っていた時、

「え～、ではこれより、上条当麻被告の最期の審判を開始する！！」

「オオオオォォ！！！」

上条当麻は教室の天井につるされていた。

青髪ピアスの高らかな宣言に、クラスの男子全員が雄たけびをあげる。

「ちょっと待てテメエら！授業が終わってさあ帰ろうと思っていた

ところを拘束したあげく何のつもりだこれは！ってか最期の審判って何！？俺なにかした！？」

さっぱり事態が呑み込めない上条がわあわあ騒ぐ。

「静かにカミやん。セクハラの罪の内容は後で説明するから」

「わけわかんねえよっ！？」

「……この期に及んでしらを切るつもり、カミやん？」

上条の叫びに青髪は軽い感じで答えるが、なぜだろう、背後から黒いオーラが見える。

……そもそも、どす黒いものを身にまとっているのは他の男子もなのだが。

周りを見渡すと、女子がこちらに冷たい視線を向けている。

（だれか……この状況で頼りになる奴は……いた！）

その中の一人に目がとまる。

「おおい吹寄！これってれっきとしたいじめだよな！なんとかしてくれよ！！」

吹寄制理。

このクラスの委員長で、超がつくほど真面目人間。

普段は上条といがみ合ってばかりだが、さすがに今はこちらに味方してくれるはず、そう上条は踏んでいた。

だが、

「……」

「ってあれ？吹寄？」

「…貴様は、一度これくらいの痛い目に遭ってもいい」

ばっさりいじめを肯定された。

「ちょっ…なにゆえ！？というかお前なんでそんな怒った顔して……」

「うるさい」

必死の説得も、なぜかいらいらしている様子の吹寄の前ではまったく意味をなさない。

「ぐっ……そ、そうだ姫神！お前からなんか言ってやってくれ！」

わらにもすがる思いで、上条は吹寄の隣にいた姫神秋沙に助けを求める。

「……そう。私が声をかけられるのは二番目。どこに居ても私は一番にはなれない……」

「？お～い、姫神……」

「女子のクラスメートという大きなアドバンテージも。後から出たキャラに食われてしまった。やっぱり私は空気。…ふふ。ふふふふ……」

「……」

よくわからないが、今はそっとしておいた方がいいようだ。

「…ということで、上条被告を女の子とラブラブの罪により、男たちからの裁きを受けてもらう」

「「「異議なーし」」」」

「待て待て異議あり！いつ俺が女の子とラブラブしたってんだ証拠を見せろ証拠を！」

青髪裁判長の言葉に同調するクラスメートを睨みつけながら上条が言う。

「はいは～い、それでは重要参考人の土御門元春が証拠をお見せするぜよ」

「って土御門！？さっきからいないと思ってたらどこ行ってたんだ？それとそのでかいボードはなんだ」

突然教室の扉を開けて現れたのは、上条の悪友の一人、土御門元春。

年中にゃーにゃー言ってるロリコン野郎というのが上条の見解だ。

さらに、大きな黒の布が掛けられたホワイトボードを押している。

「ちょっと準備をな。それでは皆さん、これを見よ！れっきとした証拠だにゃー！」

そう言って土御門がホワイトボードに掛けられた布をはぎ取る。

そこには。

「な……？」

何十枚にもわたる、上条と様々な女の子とのツーショットが貼り付けられていた。

「……これは、ここ二週間における、被告と女性との交流の瞬間を捉えたものだにゃー」

と言っているうちに土御門の表情が怒りに変わっていく。

他多数の男子も同様。

「それでは、一枚一枚説明を……」

「ちょっと待て土御門」

「は？」

土御門の言葉を遮り、上条が口を開く。

「お前……どうやってこの写真撮った？」

上条のわりと核心をついた質問に、

「え？そりゃあその筋のスペシャリストに男子全員で金を払って」

土御門はとても正直に回答した。

「ふざけんな！これ明らかに盗撮だろ！犯罪だぞ犯罪！テメエらこそ裁きを受けろこら！！」

「甘いなあカミやん。世の中は、綺麗事だけじゃやっていけないんだにゃー」

「お前に言われると簡単に否定できないのが辛いが今回は違う！絶対違う！！」

今ここで上条と口論している土御門元春は、現在絶賛多重スパイ中なのだ。

「まあ被告人の戯言は置いといて、説明始めるぜよ」

そう言って土御門は写真の一枚を指す。

「まずこの一枚。外人銀髪のシスターと身体的スキンシップをはかっている」

「いやこれ噛みつかれてるじゃん！ジュースを買えと暴力を受けてた時の写真だぞ！」

「「「許せんな」」」

「なんでだよ！？」

「次にこの一枚。うちのクラスの姫神に巫女服を着せて楽しくしゃべっている」

「俺じゃねえ！巫女服着てんのはこいつの意志だ！」

「「「なんて奴だ……女にコスプレを強要だと……？」」」

「だから違う！」

「次。なんとあの常盤台のエース・御坂美琴と仲良く追いかけっこ

をしている」

「どこが仲良くだ！命をかけて電撃から逃げてんだよ！」

「「「あの超電磁砲にまでフラグを……」」」

「立ててない！」

「次、女子中学生と一緒に公園でアイスクリームを食っている」

「これはそいつの荷物持つのを手伝ったお礼におごってもらっただけだ！」

「「「お互いのアイスを食べたのか！食べたんだな！！」」」

「食べてねええ～！！」

以下略。

「……以上のように、ぜえ、上条被告は多くの女子をその毒牙にかけてきたんだにゃー、ぜえ」

「い、言いがかりも、ハァ、いい加減にしろ…ハァ…」

「「「……疲れたなあ」」」

土御門が説明、上条が突っ込み、男子たちが反応、上条がもう一度突っ込み。

この一連の流れを数十回繰り返し、ようやくすべての写真の解説が終了した。

全員疲れ切ってしまっているようだ。

「……さて、証拠も出たところで、いよいよ刑罰執行を行おうと思うんやけど、みんなええ？」

「よし、やるか」

「とりあえず逆さ吊りにしようぜ」

「その間ずっと脇をくすぐっていよう」

「この際徹底的にぼこぼこにするのもありだな」

青髪の一言で、上条以外はすぐに元気になったが。

ちなみに女子はもう帰ってしまっている。

最後にもう一度吹寄に助けを求めたが、ものすごい形相で睨みつけ

られてしまった。

「はあ……しょうがない。なんとか凌ぐしか……お～いお前ら、せめて命だけは……」

その時、

『～～～♪』

携帯電話の着信メロディが鳴り響く。

出どころは、机の上の上条の携帯。

「…電話くらいは、出てもいいよな」

上条がそう言うと、皆もしょうがないというようにうなずき、土御門が上条の携帯を取る。

しかし。

「カミやん、『佐天涙子』って、この写真の中の誰かか？」

携帯に表示されている名前を見て、土御門が問いかける。

「……」

「沈黙は金ぜよ」

上条が黙っていることから間違いないと察した土御門は、そのまま携帯の『通話』ボタンを押す。

「ちょ、おま…何やってんむぐぐ」

それを止めようと上条が叫ぼうとするが、数人がかりで口を塞がれる。

「は～いもしもし」

『あれ？おっかしいな……すみません、間違えまし…』

「いやいや間違ってないぜよ。上条当麻はただいま電話に出ることができないので、代わりに友人である俺が取っただけだにゃー」

『そうなんですか？よかった～、ちゃんと登録できてて』

上条の口を塞いでいる数人を除いて全員が、土御門の周りに群がり、二人の会話を聞こうとする。

ちなみに上条には佐天の声はもちろん、むぐむぐ言っているので土御門の声も聞こえていない。

「それで、何か用があるなら、俺が伝えておくけど？」

『う～ん、気持ちはありがたいんですけど……お互いの都合とかも話さなきゃいけないんで、またかけ直します』

「都合？」

『ええ、食事にでも誘おうかと思ってたんです』

「…ほう、食事、ね……」

土御門、および佐天の声を聞いた男子たちに、黒いオーラがたちこめる。

『？どうかしましたか』

「いやいや。それより、ひとつカミやんの友人として聞いていいかにゃー」

『何ですか？』

土御門の放った一言は、

「君は、上条当麻をＬＩＫＥではなくＬＯＶＥ的な意味でどう思っている？」

『へっ！？え、えええ？えと、その、あの……』

「「「……」」」

たくさんの男子が、佐天の次の言葉を待つ。

『……てへっ♪』

ブチッ。

そんな音が、教室に響いた。

「…それ以上は言わなくていい。手間を取らせて悪かったにゃー」

『あ、じゃあ……失礼します』

電話が切れる。

「おい、土御門！勝手に人の電話にって怖あっ！！」

ようやく口が自由になった上条は土御門に文句を言おうとしたが、彼の気迫に気圧される。

「つ、土御門……？ていうか他の皆も……なにゆえそんなものすごい怒りの表情をしていらっしゃるのでしょう？」

「……今の僕たちは……阿修羅すらも凌駕する存在やで」

青髪の言葉と同時に。

男子全員が、上条に向かって一直線に突っ込んできた。

どう見ても殺す勢いで。

「うわああ！？お前ら落ち着け！いったい何があったんだ！？」

「うるさい！殺してやる…じわじわとなあ！」

「明らかにさっきより罰のレベルが上がってる！？」

上条の必死の言葉も、怒りと憎しみと嫉妬の権化と化した者たちには届かない。

「なにが『てへっ♪』だこの野郎！」

「フラグばっか立てやがって！！」

「この絶倫野郎！！」

ドカ、バキ、ボコ、グシャ。

「ああもう……不幸だあああ！！！」

上条の悲痛な叫びが、校舎に響くのであった。

後日談2．side上条（後書き）

はい、というわけで後日談第二弾は中身なしのギャグ話でした～（笑える人がいるか非常に不安ですが……）
にもかかわらず、今回が一番文字数多いです。空白抜いて３０００字越えてます。
てきとうに書いたからだと思いますが。
さて、なんやかんやありましたが、次回で本当の最終回、佐天さんの話です。
禁書目録の二期の告知を待ちつつ、今日はこの辺で。

感想、評価の方も気が向いたらよろしくお願いします。

…と思いましたが、まだ書きたいことがあったので後書きを続けます。
まず、ポイントについてです。
皆さんのおかげで、ついに４５０を超えました。本当にありがとうございます。しつこく感想・評価をお願いした甲斐があったというものです（笑）
もうここまで来たらいけるところまでいくだけです。後一話頑張ります。

次に、これは野球ファンの人じゃないとわからないかも知れませんが、巨人の木村拓也コーチが天国に旅立たれてしまいました。３７歳という、早すぎる死でした。禁書目録とはかけらも関係ありませんが、この場を借りてご冥福をお祈りいたします。
野球界のキムタクとして、僕も大好きな選手の一人でした。ああいうタイプの選手が巨人には必要だったのです。
皆さんも、僕の作品なんか読んでいる時間があるのなら、彼のため

に祈ってあげてください。

最後に、今回の話のパロディネタについてです。
というかこのｓｉｄｅ上条全体が、某召喚獣ラノベの雰囲気を踏襲しています。あとついでに少しだけガンダム００ネタも入っています。それと、上条さんの携帯の着メロは……わかりますか？

それでは改めてこの辺で、また次回。

後日談3．ｓｉｄｅ佐天（前書き）

まだ『連載中』となっていますが、とりあえず本編はこれで最終回です。
では、どうぞ。

後日談3．side佐天

「あ、じゃあ……失礼します」

通話が切れる。

「……びっくりしたぁ」

突然核心を突く質問をされたせいで、佐天涙子は思わず取り乱してしまった。

今も胸の中で恐ろしいほど鐘が速く鳴っていて、顔も火照っているのがわかる。

九月になっても容赦なく襲い続ける残暑が、それをさらに加速させているように感じる。

このままだと、本当にどうにかなってしまいそうだ。

「……折角、勇気出して電話したのになあ」

ちゃんと彼が出てくれていれば、こんなことにならなかったのに。

初めて掛けたのにも関わらず、その場に居なかった少年を、理不尽だとわかっていながらも少しだけ恨んだ。

五日前、病院の一室にて。

「はあ……あ、嵐が去った」

「はは……」

上条の心底安心したようなつぶやきに、佐天は苦笑いする。

先ほどまで、いきなり部屋に入ってきた銀髪の少女が、彼の頭に噛みつきながら怒り続けていたのだ。

まったくとうまは、とか、本当にいつもいつも心配かけて、とか。

…彼女の言葉の端々から、二人の間のつながりが感じられて、少しうらやましかったが。

一通りお怒りの言葉を言いつくした少女は、今度はこちらを向いて、

「私の名前は、インデックスって言うんだよ。あなたは？」

いきなり自己紹介をし、こちらにもそれを求めた。

「…佐天涙子、って言うんだけど」

教えない理由もないのでとりあえずこちらも名乗る。

「なにがあったかはなんとなくわかるけど、ひとつだけ言いたいことがあるんだよ」

「？」

「とうまはとんでもない女たらしだから、気をつけるんだよ！」

その少女――インデックスは、そう言い残して病室を出て行った。

「……あいつの言ったこと、真に受けないでくれ。俺は女たらしじゃない。彼女だっていないし」

「っ、ほんとですか！？」

「…そ、そんなに疑うように言わなくても……俺、そんな風に見えるのか……？」

佐天の強い口調に、上条は少し落ち込んでいるようだ。

…まあ、彼が気にしていることと、佐天が気にしていることとは違うのだが。

「さっきの人は……」

佐天が尋ねる。

「ん？あ～……ご近所さん、てところかな」

上条の答えに、佐天は何かを感じ取る。

「…今の微妙な間はなんですか？」

「へ？いや、何でもないって」

「……（じ～～～）」

「……あ～、本当になんでもないって」

「そうですか」

しかし、あまり追及するのもなんだかなあなので、この辺でやめておく。

（……ん？）

と、ここで佐天はあることに気付く。

……今、結構くだけた雰囲気になっている。

「あのっ」

「はい？」

今なら、いけるかもしれない。

それでも緊張するが、ちゃんと言わないと、と自分を鼓舞する。

「携帯の番号、教えてくれませんかっ」

そんなこんなで上条当麻の携帯の電話番号をゲットした佐天だったが、なかなか連絡する踏ん切りがつかず、五日も経ってようやく電話して、先ほどのような結果になったわけである。

「……公園で休もうかな」

歩いている道の横に公園を見つけた佐天は、とりあえずそこで頭を冷やすことにした。

と。

「……あれ、佐天さん？」

公園に入ると、見知った人物が声をかけてきた。

「あ、御坂さん」

御坂美琴。

学園都市に七人しかいない超能力者で、第三位の『超電磁砲』。

初めて会う前は能力を鼻にかけるような嫌な奴を想像していたのだが、実際はそんな様子などかけらもなく、勇ましい面を持つ普通の中学二年生だった。

まあなんだかなんだで色々あって、今では仲良く会話できる関係になっている。

「佐天さんも、一息つきに来たの？」

「もってことは、御坂さんもですか」

「そ。ソフトクリームでも食べよっか？」

「あ、いいですね」

そういうわけで公園に出店している店でソフトクリームを買い、二人はベンチに座る。

「……白井さん、入院してるって聞きましたけど、どんな感じですか？明日お見舞いに行こうと思ってるんですけど」

初春から、白井が風紀委員の仕事で怪我をしたと二日前に聞いたのだ。

「…まあ、ちゃんと養生すりゃ治るから心配ないんだけど……あの子、ぼろぼろのはずなのに私にべたべたしてきて……もう気力だ

けで動いてるって感じでちょっと恐怖を感じたわ」

「あ、あはは……」

元気そうで何よりだ。

「あ、そう言えば御坂さん」

佐天があることを思い出す。

「気になる人がいるんですよね？」

「ぶっ！！げほっげほ」

佐天の言葉を聞いた美琴が驚き、ソフトクリームをのどに詰まらせせきこむ。

「な、なにを突然……」

「いや、だってあのときの反応見たら誰でもわかりますって」

「だから私には気になる奴なんて……」

「私も、好きな人できたんです」

美琴の反論を遮り、佐天が言う。

「へ？」

いきなりのカミングアウトに、美琴は言葉を失う。

「高校生の人なんですけど、すごくかっこよくて。私が大能力者に襲われそうになってるところを助けてくれて。それで、惚れちゃったんです」

「……」

「？御坂さん？」

佐天の話を聞いた美琴は、いきなり真剣な表情になって、こう言った。

「あの、そいつ……もしかして、『不幸だ～』とか言ってるウニみたいな頭の奴…だったりする？」

「…あれ、どうして上条さんのこと知ってるんですか？」

驚く佐天を見て、美琴はは～っとため息をつくと、

「あのヤロウ……またか」

とかなり形容しがたい表情で言った。

明らかな怒りが感じられるが、どうしたのだろうか。

「佐天さん、あいつはだめよ」

「え？なんでですか？」

いきなりの話の展開に、佐天はついていけない。

「なんでってそりゃ……その……あいつどうしようもない馬鹿だし、だらしないし、女たらしだし……でも、いざって時には頼りになる……って違う！そういうことを言いたいんじゃなくてその、あ～～もう！」

けなしているのか、褒めているのか。

要領の得ないことを言う美琴の顔は、少し赤くなっている気がする。

……さらに、この焦りよう。

「……あ～、もしかして……かぶっちゃいました？」

「！！な、なに言ってんのよ！私はあの馬鹿のことなんてなんっっとも思ってなんかないわよ！！」

佐天の言葉を、美琴は激しく否定する。

「今の『なん』と『とも』の中の間が、すべてを証明しているんですけど」

「違うって言ったら違うの。……大体、私はあいつの携帯の番号だって知らないんだから」

携帯の番号を知らないから、別に気になってなんかいない。

どうやらそう言いたいようだ。
だが。

「…へえ、そうなんですか」

先ほどの電話が、残念な結果に終わったからでもあるのだろう。
その言葉によって、佐天の心に小悪魔が召喚された。

「知りたいですか？番号」

「へ？」

美琴がすっきょんとうな声を出す。

「私はこの前上条さんに教えてもらいましたから。だから、携帯の番号、教えてもいいですけど」

「うぐぅ……」

その言葉を聞いて、美琴は予想通りの反応を見せる。

ちょっとしたイタズラだ。

おそらく、彼女の心の中では激しい闘いが行われているのだろう。

電話番号は、知りたいに決まっている。

しかし、素直じゃない気持ちがそれを邪魔している。

「くっ、そんなわけ……いや、でも……」

ここまで困惑している御坂美琴を見るのは初めてだった。

だから、自然に顔の表情が緩んでしまう。

「…はっ！ニ、ニヤニヤするなあ～～！！」

そんな佐天の様子に気づいた美琴が、そう叫んだ。

……この日以来、二人は友達でありながらも恋のライバルみたいな関係になったとか、そうでないとか。

そんなこんなで、学園都市の時は流れる。

「…この前の事は、すべて俺の責任です。本当に、すみませんでした」

ある者は、新たなスタートに向かい始め、

「だ〜〜！！もうなんなんだよお前ら〜〜〜！！！」

ある者は、いつものように不幸？で。

「……負けませんよ、御坂さん」

ある者は、闘いの始まりを感じていた。

そんな、愛すべき日々を、皆が過ごしていた。

後日談3．ｓｉｄｅ佐天（後書き）

お、終わった……ようやく終わりました。
これにて作者の処女作『とある二人の無能力者』完結です。
最後は佐天さんのお話。御坂美琴に宣戦布告です。ツンデレを書くのはとても難しいってことがわかりました。

黒子の負傷は原作八巻のものです。アニメしか見ていない人はわからないと思いますが、まあ色々あったのです。アニメ二期でやるはず……多分。

書きたいことは山ほどあるのですが、作品全体の話については、またあとがきで一話取るのでその時に。

感想・評価のほうも待ってます。ついに５００ポイント突破！！みなさんありがとうございます！！

それではひとまず。

読んでくださって、本当にありがとうございました！

あとがきと次作予告

まず一言。

ここまで読んでくださって、ありがとうございました。

第一話を投稿したのが昨年の１１月３０日なので、４ヶ月半ほどでようやく完結したということになります。処女作であるこの作品を一言で言い表せば、まあ「へたくそ」で片付くと思いますね。色々な点で未熟だったと思います。全体の構成とか、キャラの性格とか、文章そのものとか……

それでもポイントが５００を超えるほど多くの人に読んでいただけたのはとてもうれしいです。お気に入り登録してくださった方、評価してくださった方、感想を書いてくれた方は特に、本当にありがとうございました。やっぱり禁書目録および超電磁砲は人気ですね。

この小説を書くきっかけになった『かっこいい上条さんを書きたい』という目的は、まあ達成できたと思います。上条と佐天という組み合わせも、そこそこできたかな？て感じです。やはりまだまだでしょうが。

そんなわけで、『とある二人の無能力者』これにて終わりということになります。

ここからは次書こうと思っている作品についてです。以前、次は禁書目録か仮面ライダーディケイドを書こうと思っていると言いましたが、結果、次は禁書目録を書くことにしました。

そして、内容については、基本シリアスなしの、ドタバタコメディ

ーにしようと考えています。カップリングについても、少し特定のキャラをひいきするかもしれませんが、基本的にはなしにしていこうと思っています。かといって恋愛がないわけではありません。多くのキャラがメインヒロインということです。

なんでそういう感じにしようと思ったかというと、最近原作が佳境を迎えていて、シリアスが多めなので、じゃあこっちで楽しくやるか、と考えたからです。

そんな感じで、まあそのうち投稿すると思うので、あまり期待しないで待っててください。

最後にもう一度、ありがとうございました。

第二部始まるかもっていうお知らせ

作者「ふははは……戻ってきた。戻って来たぞ～！！」

上条「誰も待ってねえよ。つかこの作品は完結したはずだろ！？」

佐天「終わってから半年経って、何故今頃……？」

作者「そんなの決まってるじゃないか。原作の神展開。そしてアニメ二期開始……これらの意味するところは！」

上条「つまり、何でもいいから話を書きたいっていう気持ちが抑えきれなくなったんだな」

佐天「っていうか無理だよ！アホな作者は現在４作品同時進行なんてやってて、作品によっちゃ月一ペースになるものだってあるんだから」

作者「それは重々わかっている。だからこそ、新たに作品を始めるのではなく、既に完結した処女作に目をつけたわけだ。更新が激しく不定期になるからこそ、というわけだ」

上条「なるほど……一旦話が完結してるから、適当に小話入れる分にはちょうどいい、か」

作者「それに、この作品の文字数を見てみろ。３８４０９文字。驚きの少なさだぞ」

佐天「確かに少ない……よくこの文字数で完結できたもんだね」

作者「というわけで、もう少し話を加えたって問題ないだろうってことだよ。オーケー？」

上条「…まあ、別にいいけど。それで、どんな話にするんだ？」

作者「タイトル通り、君達2人の出番を多くするつもりだが……当然他のキャラも結構出す。位置づけとしては、この作品の次回作にあたっている『上条当麻のなが～い一日』につながるような話にしていく予定だね」

佐天「なるほど……」

作者「もちろん、たまにバトルもはさめたらいいな～とか思ってます。というわけで、読者のみなさん、これからよろしくお願いします！」

上条＆佐天「お願いします！」

第二部始まるかもっていうお知らせ（後書き）

え～と、とりあえず今のところは何も決まっていない段階なので、こういう話を書いて欲しいな～って意見があれば、どんどん書きこんじゃってください！よろしくお願いします！

第二部　プロローグ　祭りの前の少年少女（前書き）

というわけで始まりました第二部。よろしくお願いします。

第二部　プロローグ　祭りの前の少年少女

そろそろ学校に向かおうという時間に、ツンツン頭の少年・上条当麻は、机に置かれた一冊のノートを凝視していた。

「これは……非常にまずい」

「とうま、どうしたの？それなあに？」

白い修道服を身に纏った同居人・インデックスが尋ねると、上条は大きなため息をついて口を開く。

「これは家計簿。つまり上条さんちの経済事情を記したもの。そしてこれを見る限り、今の家の家計は火の車……後はわかるな」

「どうなるの？」

「飯がなくなる」

そう上条が言った瞬間、インデックスの顔つきがさっと青ざめる。まるでこの世の終わりを感じているかのように。

「そ、それはだめなんだよとうま！とうまが学校通えなくなってもいいから、わたしのごはんだけは、どうか……！」

「テメエはほんとに家主に対する礼儀ってもんがなってねえなあ！？」

あんまりといえばあんまりなインデックスの言葉に内心傷ついた上条は、そのまま立ちあがって玄関へ向かう。そろそろ出発しないと遅刻してしまう。

「じゃ、いってきまーす」

食事にありつけなくなるという地獄を想像して震えあがっているのか、インデックスからの返事は返ってこなかった。

『大覇星祭まで、あと４日』

とある中学校の廊下の窓から、上空に浮かぶ飛行船の電光掲示版をぼーっと眺める少女がひとり。

黒い髪を長く伸ばしたその少女は、次に右手に持つ携帯電話に目を向ける。

「う～ん……どうしたもんかなあ……」

「どうかしたんですか、佐天さん？」

「うひゃあっ！？……な、なんだ初春か。びっくりさせないでよ、もー」

友人の初春飾利に声をかけられ、完全に自分の世界に入り込んでいた少女———佐天涙子は驚きのあまり跳び上がる。

「す、すみません……。それで、何か悩みごとですか？」

「へ？どうしてわかるの？」

「それはわかりますよ。明らかに『悩んでます』って顔してましたから」

初春の言葉に、あちゃーと額に手を当てる佐天。…薄々わかっていたことだが、どうも自分は思っていることをすぐ顔に出すタイプらしい。

まあ、ばれてしまったことは仕方がない。折角だから相談してみようと、彼女は初春に考え事を告げる。

「もうすぐ大覇星祭じゃん？」

「そうですね」

「…それでさ、競技に出場する時間以外は暇だし、出店もいっぱい出てるし……誘ってみようかなって思ってるんだけど……」

「誘ってみるって……ああ、もしかして例の上条当麻さんをですか？」

目的語の抜け落ちた佐天のセリフの埋める初春の質問に、佐天は顔を赤らめながらこくりとうなずく。

上条当麻。

ついこの前出会ったばかりの、ツンツン頭の高校生。

最初に会ったときは、好物のアイスクリームを譲ってくれて。

次に出会ったときは、大量の荷物を家まで運ぶのを手伝ってくれて。

そして、三度目に出会ったときは、街中で暴れる強能力者を前に一歩も退かず、佐天と小さな女の子を守りきった。

その強さと優しさを目の当たりにした佐天は、いつのまにか彼に好意をを抱いてしまっていたのだ。

彼の携帯の番号とメールアドレスを教えてもらった後、友人でもあり憧れでもあるあの第三位・御坂美琴に宣戦布告。

そして今、想い人と一緒に大覇星祭を回るかどうか、絶賛恋のお悩み中というわけだ。

「いいんじゃないですか？今すぐ誘えばいいと思いますけど」

「それがなかなかできないから困ってるの！…乙女には恥じらいってもんがあるんだから」

要は断られやしないかとびくびくして誘うことができないのだ。上条と知り合って日は浅いが、彼が女性と仲良くなりやすいという情報は美琴経由で入って来ており、佐天自身も彼と親しい間柄のインデックスという少女と出会っている。

……何より、こういう感情を抱くことなど初めてで、どうしていいかわからない。

「それでも誘うべきです！『乙女は何があっても猪突猛進ですの！』って白井さんも言ってました」

「いや、あの人はむしろ少し自重した方がいいんじゃないかな……」

いつもアレがアレな感じで美琴に電撃を食らっている風紀委員を思い、佐天は微妙な表情になる。……まあ、あの不屈の心は多少見習うべきなのかもしれないが。

「本当に、どうしたもんかなあ……」

佐天の小さなつぶやきは、そのまま虚空へ消えていく。

とある高校の放課後。

上条当麻は、さきほど配られた一枚のチラシをずっと見つめていた。

「上条くん。いったいどうしたの」

クラスメイトの姫神秋沙が声をかけると、上条はふふふと不気味な笑い声を口から出し始めた。

「これだ……これしかないっ……！」

彼の手に握られたチラシには、大体こんな内容のことが書かれていた。

『来たれ学徒達！大覇星祭特別プログラム・大クイズ（＋α）大会！１位の賞金はなんと１０万円！！』

「まさに一攫千金…ははっ、はーっはっはっは！！」

「……傍から見ると。気持ち悪い」

姫神のつぶやきなど気にも留めず、上条は起死回生のチャンスに心躍らせるのだった。

第二部　プロローグ　祭りの前の少年少女（後書き）

とりあえずプロローグということで今回は短めです。次回からは文章量を増やします。読めばお分かりいただけるように大覇星祭の少し前から物語はスタートです。美琴など他のメインキャラも登場予定なので、ほどほどに楽しみにしていてください。

感想や評価などあれば、ぜひお気軽にお寄せください。作者が舞い踊ります。

では、また次回。

第一話　人員集め（前書き）

このラノ２０１１で禁書目録の成績がすごかったですね。あまりにすごくてちょっと疑っちゃいますが、素直に喜びます。何より上条さん一位がめっちゃうれしいです！！

第一話　人員集め

「というわけで一緒に頂点行こうぜ姫神！」

「……なぜ私も？」

グッと親指を立てて爽やかに勧誘してくる上条に、冷静に疑問を呈する姫神。

それに対して上条は、待ってましたとばかりにチラシを掲げ、説明を始める。

「ほら、この大会5人でチーム組んで参加しなきゃならないんだよ。インデックスは普段の食費の対価として強制的に参加させるとして、集めるメンバーは後3人」

「はあ」

「だから手伝ってくれ！賞金はちゃんと山分けするから！」

「でも。私はそういうのに自信がない――――」

ガシッ

姫神が断ろうとしたその瞬間、上条が彼女の両肩を掴む。驚く姫神を真剣に見つめて、上条は言う。

「頼む！俺の生活がかかってんだ！大覇星祭まで後４日、時間がねえ……どうしてもお前が必要なんだ、姫神！！」

本気になりすぎて気づいていないのか、姫神にかなり顔を近づけていても全く恥ずかしがるそぶりを見せない上条。対照的に、姫神の顔面はどんどん赤くなり、胸の鼓動も高鳴っていき――――

「……ずるい」

「え？今なんて……」

「……仕方ないから。チームに入ってもいい」

姫神の答えを聞いた瞬間、上条の表情が歓喜に染まる。

「よっしゃ、サンキュー姫神！これで３人、絶対間に合わせてやる

……って、どうした姫神。リンゴみたいに真っ赤になって」

「……そろそろ。手を離してくれると助かる」

「あ？……んな～～っ！いつの間にか何やってんだ俺は～！？」

その後しばらく、２人の間になんとも言えない空気が漂ったのは言うまでもない。

学校を出た上条は、姫神を連れて学生がひしめく街路の中を歩いて行く。

「それで。誰かあてになる人はいるの？」

「ああ。俺達に足りない要素を補ってくれそうなやつがいる。ちょっと扱いが難しいけどな」

任せておけ、と自信ありげな様子の上条。

「足りない要素……」

「ま、簡単に言っちまえば『学力』だな。俺達は普通の高校に通ってる人間だし、優勝狙うなら名門のとこの学生がひとりは欲しいだろ？」

なるほど、と小さくうなずく姫神。クイズをやるなら学力が大切なのは常識なので、納得するのも当然か。

「ところで、ついて来てくれてるけどよかったのか？別に勧誘だけなら俺だけでもできるんだぞ？」

ふと気づいたように尋ねる上条。彼としては、配慮のつもりで口にした言葉だったのだが。

「……私がいると。迷惑だった？」

「いやいやいや、なに急に暗くなってんだ！？わざわざ一緒に来てくれてるのに迷惑なわけねーだろ」

姫神の予想外の反応に戸惑いながらも上条はそう返す。

すると、姫神はフッと小さく笑みを浮かべ、

「なら。一緒に歩くくらいはいいかな」

とのたまった。一瞬その言葉の意味を考え、上条の思考が混乱する。

「（え？ど、どゆこと？俺と一緒に歩いてて楽しいのか、こいつは？……ハッ！そうか、わかったぞ。姫神はあんな過去があったせいで、クラスメートと街を歩くなんてできごとが新鮮なんだ！なるほど、そうだよな。誰だって初めてのことは楽しいもんな）」

ひとりで勝手に明後日の方向に解釈する上条の様子を見て、姫神は小さくため息をついていた。

「おう、やっぱここにいたか。探したぜ」

上条がそう声をかけた相手は。

「…な、何よあんた。そっちから探しに来るなんて珍しいじゃない」

「お姉様。その言い方から察するに、いつもはお姉様が殿方をお探しになっているのでしょうか」

「っ！？な、ななな何言ってんのよあんた！この私がこんな大馬鹿野郎を探すなんてありえないでしょうが！」

やってきた早々散々な言われように多少傷つきつつ、常盤台の超能力者を眺める上条。女子寮にいなかったため、彼女のルームメイトで現在入院中の白井黒子の病室を訪ねたのだが、その判断は見事正

解だったようだ。

「…ところでそっちの人は？」

ひとまず落ち着いた美琴が、上条の横に立っている少女について尋ねる。

「ああ、こいつは俺のクラスメートの姫神秋沙だ。んで姫神、今しゃべった方が御坂美琴で、ベッドで寝てる方が白井黒子だ。どっちも常盤台の生徒な」

「御坂美琴って。あの超電磁砲？」

「え、ええ。そうですけど……」

姫神の問いに美琴が答えると、姫神は上条の方を見て一言。

「中学生にまで。節操無いね。君」

「何の話だよ！？言っとくけどな、この前クラスの馬鹿どもが言ってたことは嘘っぱちだからな！信じるなよ！」

「…病室では静かにしていただけませんこと？」

思わず叫んでしまう上条に、白井の言葉が突き刺さる。素直に頭を下げる上条。

「……で？用件は何なのよ」

「あ、ああそうだった。……実は、お前に大切な頼みがあるんだ」

「頼み……？」

上条は息を大きく吸い、気合いを入れる。中学生とはいえ、彼女が自分とは比べ物にもならない頭脳を持っているのは確かだ。彼女を引きいれることが、クイズ大会優勝への大きな一歩になるはず。

絶対勧誘に成功しなければならない。ありったけの思いをこめた一言を――――

「――――つきあってくれ！！」

一言を、これでもかというほど真剣な顔で言い放った。

「……え？えええええっ！？ちょ、あんたいきなり何言って…そういうのはちゃんと段階踏んで……」

「お、お姉様、そのまんざらでもないような表情は何なんですの！？や、やはりあの類人猿のことがアアアァ！！」

赤面してもじもじする美琴と、そんな彼女の反応に愕然とする白井。

そして。

バゴン！という轟音とともに、姫神が上条の頭を殴り飛ばしていた。

「んぬごおおお！いきなり何しやがる！」

「君は。アホか」

「……なるほど、そういうことでしたの。危ないところでしたわ、私驚きのあまり『うっかり』上条さんの脳天と心臓に金属の矢をテレポートさせるところでした」

「マジで危ねえよ！？」

姫神が誤解を解いたことで、白井は落ち着きを取り戻していた。……両手にある金属の矢に上条は戦慄していたが。

上条は先ほどから黙っている美琴に対して、詫びを入れようと口を開く。

「あーいや、悪かったな。ちょっと言葉が足りなくてさ。あっははは」

———ブチッ

「え、今何か切れるような音が…って御坂さん！？」

「あんたは……人をおちょくってんのかあああああ！！！」

絶叫とともに、轟！と空気を切った美琴の拳が上条に一直線に向かい――

ドゴオオッ！！という大きな音とともに、上条の体が崩れ落ちる。

「が、ガゼルパンチ……だと…？」

その拳、世界狙えるぜ――などという言葉が頭をよぎりながら、上条の意識はブラックアウトした。

「まったく！まったくこの馬鹿は！」

「「……」」

「…な、なんで黒子も姫神さんもこっち見て……？」

なぜだか突き刺さる２つの視線にたじろぐ美琴。

「…まあいいか。それより。参加するかどうかは決まった？」

「そう言われましてもねえ……というか、こんな奴に付き合ってあげてるなんて、姫神さんも人がいいですね」

「…彼には。返しきれないほどの恩があるから」

姫神の言葉を聞いて、美琴の表情が少し揺れる。

「……人がいいのはあいつの方、か。……仕方ない、クイズ自体は嫌いじゃないし、参加しますよ」

「……じーー」

「え？なんでまたジト目で私を見るんですか！？」

「……なんとなく」

「あいたたた……」

と、ここで床に倒れていた上条が意識を取り戻し、起き上ってきた。

「ちっ、まだ息の根が残っていたようね。デンプシーロールの方がよかったかしら」

「できんのかよ！？つか、確かに俺が悪かったけどあそこまで思いっきり殴ることねーだろ！」

「うっさいこの馬鹿！！クイズ大会に参加してあげるんだからあれぐらいやったって問題ないでしょうが！」

「あの、ですから病室では……」

「「ああ！？」」

「…何でもありませんの」

完全に熱くなってしまった2人は止められないと感じた白井は、言葉を途中で引っ込める。姫神も同意見なのか、悟ったように口喧嘩を眺めている。

そういているうちにも、上条と美琴の言い合いはどんどんヒートア

ップしていき――――

「…あ、あの～、失礼しま～す」

と、そのとき、病室にひとりの少女が入ってきた。2人の声が外に響いていたのだろう、かなり恐る恐るとした挨拶だ。

「あら佐天さん。わざわざ来てくださいましたの」

「いえ、ちょっと通りがかったのでお見舞いに来ただけですから。あ、初春は風紀委員の仕事です」

白井と少女――――佐天涙子が互いに挨拶をする。その様子を見ながら、上条はグッと小さくガッツポーズをとる。

「ナイスタイミングだ。後ひとり、常識人が欲しいと思っていたんだ！」

「……姫神さん。こいつ喧嘩売ってるんでしょうか」

「……たぶん」

後ろで少女2人が怒りを溜めているのにも気づかず、上条は佐天の方に向かっていく。

「あ……上条さん。あのですね……」

「佐天。唐突だが、頼みがある」

「え……？」

何か言おうとしていた佐天の言葉を遮るように、上条は彼女に向かってはっきりと———

「つきあってく———」

「「それはもういい！！」」

直後、2つの拳を叩きつけられた上条の頭は沈み、ものすごい勢いで床に突っ伏した。

いきなりの展開についていけない佐天、ただ一言、こう言うしかで

きなかった。

「えっと……漫才の練習ですか？」

「「違う！！」」

第一話　人員集め（後書き）

ふう……

今回は佐天さんの出番は最後だけでした。が、次回はいっぱいしゃべります。

本文であったネタは、最近作者がはじめの一歩にはまり始めたからです。でも漫画を大量に買う気はしないので、とりあえずはアニメを見ます。伊達ＶＳリカルドまで見たところでは、２回目の一歩ＶＳ千堂と木村ＶＳ間柴が一番良かったですかね。特に死刑執行は脇役同士の試合なのにめっちゃ燃えました…っていかんいかん。話題が逸れた。

感想や評価などあれば、ぜひ気軽にお寄せください。いっぱいもらえれば、それだけ作者のやる気も出て、更新速度も多分上がります。

では、また次回。

第二話　メンバー決定と波乱の予感

「――というわけなんだけど」

美琴と姫神のダブルパンチから復活した上条は、展開についていけない佐天に事情を説明し、姫神の紹介も行う。……その間、背後からの視線が非常に痛かったが。

「……なるほど」

話を聞いた佐天は、うーんと少し唸った後。

「いいですよ。あんまり自信ないですけど、やれるだけはやってみます！」

にこっと笑って肯定の返事をした。

「おお、ありがとうございます佐天さん！あなた様のおかげでメンバーがそろいました！」

「……私の時と全然態度が違うんだけど」

「…ああいう純粋な笑顔に。コロッといってしまうタイプなのかも」

あからさまな上条の態度の変化に眉をしかめる2人だが、当の本人はそれにまったく気づいていない。

「……でも変ですね。私も無能力者ですけど、無駄遣いしない限り生活費が足りなくなるなんてことはないんだけどなあ」

浮かんできた疑問に首をかしげる佐天。まあ、それは当然だろう。いくら学園都市広しといえども、一ヶ月に数回も死ぬような目に遭って入院する上に女の子をひとり居候させているような無能力者は上条当麻ただひとりに違いない。

「あ、あはは……ちょっと医療費が重なってな」

年頃の男女が2人きりで生活していることを簡単にばらすわけにもいかないので、とりあえず片方の原因だけを話す上条。

「医療費……？上条さん、何か持病でも……って、まさか」

何かに気づいたようにハッとする佐天。その様子を見て、美琴や姫神、ベッドの上の白井がうなずく。

「そのまさかよ。この馬鹿、やたらめったらそこいらの不良に襲われたりしてるから年中怪我が絶えないわけ」

「時には自分から首を突っ込んだりしているようですわね」

「……そして。フラグを建てて帰ってくる」

途中まで心配そうな表情をしていた佐天だが、姫神の『フラグ』というセリフを聞いて顔をしかめる。

「……フラグ？」

「ちょ、何言ってくれちゃってるんでせうか姫神ちゃんは！佐天、前も言ったけど嘘だからな。俺女たらしとかそんなんじゃないからな」

「……あっ。すみません、今はそんなことどうでもいいです」

「ってええええ！？何だその反応！どうでもよくねえよ！？知り合いに自分がどう思われてるかとかめちゃくちゃ大事なことだって――」

佐天の言葉に傷ついた上条は食い下がろうとするが――――

「…あれ？佐天？」

なぜか彼女が頬を赤らめ、上目遣いでこちらを見つめていることに気づき、思わず言葉が引っ込む。

「あ、あのですね……その。ちょっと聞きたいことがあるんですけど……」

「（…な、なんだなんだ？なんでこいつはこんな可愛らしい顔をしているんだ？）」

男を落とす凶悪コンボを繰り出してくる佐天。おそらく意識せずにやっているのだろうが、なんという破壊力だ。

「か、かか上条さんと……その、一緒に――――」

「わかった！」

「えっ……」

佐天が言葉を言い終えないうちに、上条はすべてを理解したというようにうんうんと頷く。

そして、彼はその質問の答えを返す。

「この前俺と一緒にいた奴のことか？あいつも参加するから、仲良くなりたいんなら……佐天？」

「……はあ。……もういいです」

ぷいっと後ろを向いてしまう佐天。何か悪いことをしたのかと上条は戸惑い、周囲の様子をうかがうが。

「「「（…アホかこいつ）」」」

という視線が痛いほど伝わって来ただけだった。

「……ばか」

「（な、なんだ？何がいけなかったんだ～！？）」

佐天の拗ねたようなつぶやきに、上条はますます混乱するのだった。

――――そんな感じでしばらく無言の時間が流れた後、さすがに気まずいと感じたのか、美琴が助け船を出す。

「そ、それじゃあさ。メンバーも決まったことだし、作戦会議でも開かない？」

「お、おう！いいなそれ。やろうやろう、な！！」

何とか場の空気を切り替えたい上条は、大して考えもせず美琴の発言に賛成する。

……だが、その安直な思考が原因で、ここから彼は自分の首を絞めることとなる。

上条が賛成したのを見て、姫神が提案する。

「だったら彼の家に行くのがいい。あの子もい――――」

「だーーーーっ！うわー！うわーー！！」

この場で上条以外に唯一、彼の家にはシスターが居候しているという事実を知っている少女・姫神秋沙。彼女が平然とそのことを口にしようとしたところを、上条は全力でブロックする。

「……何よあんた。いきなり大声出して」

「病室ではお静かにと、何度言ったらわかっていただけるのでしょうか。後で病院の方に怒られるのは私なんですのよ？」

注意してくる美琴と白井だが、どうやら姫神の爆弾発言は聞こえていないようだ。

「ああ、すまんすまん。それよりさ、やっぱり作戦会議っていうのはナシの方向で……」

「はあ！？いまさら何言ってんのよあんた。姫神さんの言った通り

…あ、あんたの家でやるんだからね！ほら、佐天さんも、やるからには優勝目指して全力を尽くしたいわよね？」

「ふぇ？わ、私ですか？……そ、そうですね。私も『上条さんの家に行って』作戦会議したいです！」

「あ……」

美琴も、急に話を振られた佐天も、上条宅で作戦会議を行うことに乗り気である。

「（御坂よ……非常に珍しくお前が気を利かせてくれているのはすっごくうれしいんだけど……その作戦だけはやめてほしかったと上条さんは切に思います）」

最後の希望とばかりに姫神の方を見るが、彼女もこくりと頷くだけ。つまり賛成ということだ。

「……よし。それじゃ、今から俺の家に行くか」

なんとかごまかしきるしかない。インデックスという少女が、上条宅に住んでいるということを。

決意を固め、上条は白井に挨拶をしてから病室を出ていく。残りの3人もそれに従うのだが。

「申し訳ありませんが、佐天さんと2人きりで、少しお話をしてもよろしいでしょうか」

という白井の申し出により、佐天だけが病室に残る形となった。

「……佐天さん」

「は、はい」

いつになく真剣な白井の表情につられ、顔を引き締める佐天。

「単刀直入にお伺いいたしますの。……あの殿方に、恋愛感情を持っていらっしゃいますね？」

———ばればれだったのだろうか。そう思いつつ、佐天は素直に頷く。

「…やはりそうでしたか」

「あの…白井さん。ひとつ聞きたいことがあるんですけど」

「なんですの？」

「上条さんって……白井さんから見て、どんな人なんですか？」

白井黒子は、御坂美琴に好意を抱いている。そして御坂美琴は、上条当麻に好意を抱いている。あそこまで美琴ＬＯＶＥな白井のことだ。普通ならば上条によい感情を持っているとは考えにくい。

……そんな彼女が、具体的に彼をどう思っているのか。

「そうですわね……」

白井は顎に手を当て、しばらくの間考え込む。

「……普段は頼りないように見えますが、あの殿方は、いざという時には信頼できる人物。これだけは間違いありませんの。ですから、私も、あの方を素晴らしい方だと――――」

「（すごい。白井さんにここまで言わせるなんて、上条さんってやっぱり――――）」

「――――申し上げたいのですが」

「……え？」

いきなり白井の声のトーンが下がったことに気づいた佐天。

直後。

「お姉様があの類人猿を想っていなければの話ですわ！！認めません！私は絶対に認めませんの！この私を差し置いて、あの類人猿とお姉様が付き合うなど……佐天さん！！」

「は、はいっ」

「絶対にあの殿方を落としなさい！そうすればお姉様も諦めて私の方を向いてくれるはず！！」

「……は、はあ……」

応援してくれる人ができたのはうれしいのだが、動機が不純なことに、なんだか複雑な心持ちになる佐天なのであった。

第二話　メンバー決定と波乱の予感（後書き）

……年明けるまでに投稿しようと思ったのに間に合いませんでしたｏｒｚ

そんなわけで新年第一弾はこんな感じになりました。次回、ヤバい感じがしますが、はたしてどうなることやら……

感想や評価などあれば、どうぞお気軽にお寄せください。

それでは皆さん、今年もよろしければ拙作にお付き合いいただけると嬉しい限りでございます。

行間？（前書き）

さすがにこのままアホアホ漫才を続けるわけにもいかないので、何か手を加えようといろいろ考えた結果……オリキャラを出すことになりました。

行間？

『それでね～、友達の靖子ちゃんがねー――――』

「ふふ、それはよかったわね」

能力者を養成する街・学園都市。その中でトップクラスのレベルを持つ常盤台中学の学生寮の一室で、ひとりの少女が携帯電話を片手に微笑んでいた。

「……由美。学校、楽しい？」

『うん！すっごく楽しい！お姉ちゃんは？』

由美と呼ばれた女の子は、元気な声で姉である少女に尋ねる。

「……まあ、ぼちぼちね」

対して姉は、静かにそう答えた。

「それじゃ、体に気をつけるのよ」

『うん、またねお姉ちゃん！』

挨拶を終え、通話終了のボタンを押した少女は、小さく息をつく。

「本当に……元気ね、あの子は」

「おお～う、シスコン真理ちゃんが妹を想ってなんかつぶやいてるぞ～」

と、彼女の思考を妨害するかのように、いつの間にか部屋に入ってきていたルームメイトがからかうように声をかけてきた。

「秋子……いつになったらシスコンなどという汚らわしい単語を口にしなくなるの？それとも私に直接脳をいじってほしいのかしら」

「その脅しはあんたが言うと冗談に聞こえないからやめてもらえないかな……やろうと思えば人の人格変えるのなんてちょちょいのちょいなんでしょ」

おどけた調子で秋子が言っている言葉は真実だ。

『心理掌握（メンタルアウト）』――――それが、天野真理という少女が持つ能力。他人の記憶の読心、人格の洗脳、離れた相手との念話、想いの消去、意志の増幅、思考の再現、感情の移植……ありとあらゆる精神的現象を引き起こすことを可能にする力。

学園都市最強の精神系能力者として君臨する超能力者の少女は、眼前の同僚を見ながら言葉を発する。

「怖がるのなら、最初から人をからかうのはやめなさい」

「え～？でも実際そうじゃん。あれだけたくさんいる派閥の生徒には完全に無関心のくせに、小学1年生の由美ちゃんにだけはまるで別人なんだから。その優しさを、ちょっとくらい他の人間にもわけてあげてもいいんじゃない？」

態度とは裏腹に、いまだ反対意見を口にする秋子だが、真理は首を横に振る。

「優しくする義理なんてないわ。誰もかれも、私に取り入って有利な立場を作ることしか考えてないんだから」

心を読んでしまえば一発でわかる。自分に近づいてくる人間のほとんどは、打算的なものを腹に抱えている、と。そんな人間のために、

どうして愛想をふりまいてやらなければならないのか。

「……勝手に心の声が聞こえるってのも、楽じゃないわね」

「何を今更。もう慣れたわ」

そう。自らの強力すぎる能力を、真理は完全にコントロールしきってはいない。だから、周りの人間の思考が絶えず耳に入ってくるのだ。最初はそのあまりの量に気が狂いそうになったモノの、今は必要でない物以外は雑音として処理できるまでになった。……うるさいのには変わりないが。

――そういうわけで、真理には心を許すことのできる人物がほぼ皆無といった状態だ。友人と呼べるのは、今会話しているルームメイトくらいだろう。

だから、彼女は秋子に一応の感謝はしているのだが。

「ところで、話は変わるんだけどさ――」

……ただ、問題があるとすれば――

「じゃーん！！買ってきちゃったよ～、５分の１立華かなでフィギュア！もうやばいほど可愛いね！天使ちゃんマジ天使！あと過去の名作アニメのＤＶＤも大量購入してきたから一緒に見よう！」

重度のオタクだということだろうか。なにせ、平気で『頑張って能力のレベルを上げようとしているのはゲームとかグッズとか集める金を増やすため』と公言するような人間なのだ。

「……ねえ秋子。ひとついいかしら」

「ん、なに？」

拳をぷるぷる震わせながら、真理は静かに問いかける。

「ここはあなただけの部屋じゃないのよ。そこら中にフィギュアだのアニメのＤＶＤだのが散乱している場所に、私は住みたくないのだけれど。あなたにはルームメイトに対する気遣いがないのかしら」

「ああ、その点は大丈夫。ちゃんと秘策を思いついたから」

「……聞かせてもらいましょうか」

「ぶっちゃけ、あんたが私の仲間になればいいのよ！というわけで、手始めに『人生』とうたわれる恋愛ゲームが原作のこのアニメを視聴して――――」

「そう、そんなに人格を変えてほしいの。わかったわ、特別に『誰からも好かれる清楚なお嬢様』にしてあげる」

「すみませんすみません許してください……でもこのアニメは本気でおすすめなんだけどなあ。観終わった時にはめでたく『それと便座カバー』が口癖になると思うんだけど……」

「それのどこがめでたいのよ……」

土下座してもなお食い下がる秋子。呆れるまでの根性だ。

「（やっぱりこの前の誘い、断ろうかしら）」

秋子の様子を見て、真理は昨日引き受けた彼女からの頼みを思い出す。

内容は、『少しでも資金が欲しいから、大覇星祭で開催されるクイズ大会に優勝して賞金をもらいたい。そこであんたの力を貸して』というもの。

確かに、真理の能力で出題者の心を読めばクイズには全問正解だろう。優勝するのは難しいことではない。

しかし、そうなるとこの部屋の目障りなものがさらに増えるわけで。

「はあ……」

土下座を続ける友人を前にして、大きくため息をつく真理だった。

行間？（後書き）

というわけで原作じゃいまだ謎に包まれた「心理掌握」の少女を、勝手に設定捏造して登場させました。こういうのが嫌という方、申し訳ありません。

こうなった経緯についてですが。
どうも最近ポイントが伸び悩んでいるような…とか思って他の方の作品とかを読ませてもらっていたのです。自分の作品には何が足りないのか。

……で、色々考えた結果、第一部に引き続いてオリキャラを投入することになりました。え？過程が飛んでるって？でも自分でもどうしてその発想に至ったのかわからないし……

とにかく、シリアス（笑）レベルのシリアスしか書けない僕にはひたすらギャグ路線で進むしか道はないんだ！一応バトルも用意してはいますが……

とまあこんな感じですが、感想や評価などあれば、気軽にお寄せください。

では、また次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8209i/

とある二人の無能力者（レベル０）

2011年8月11日10時04分発行